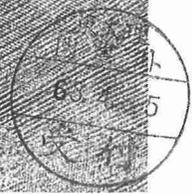
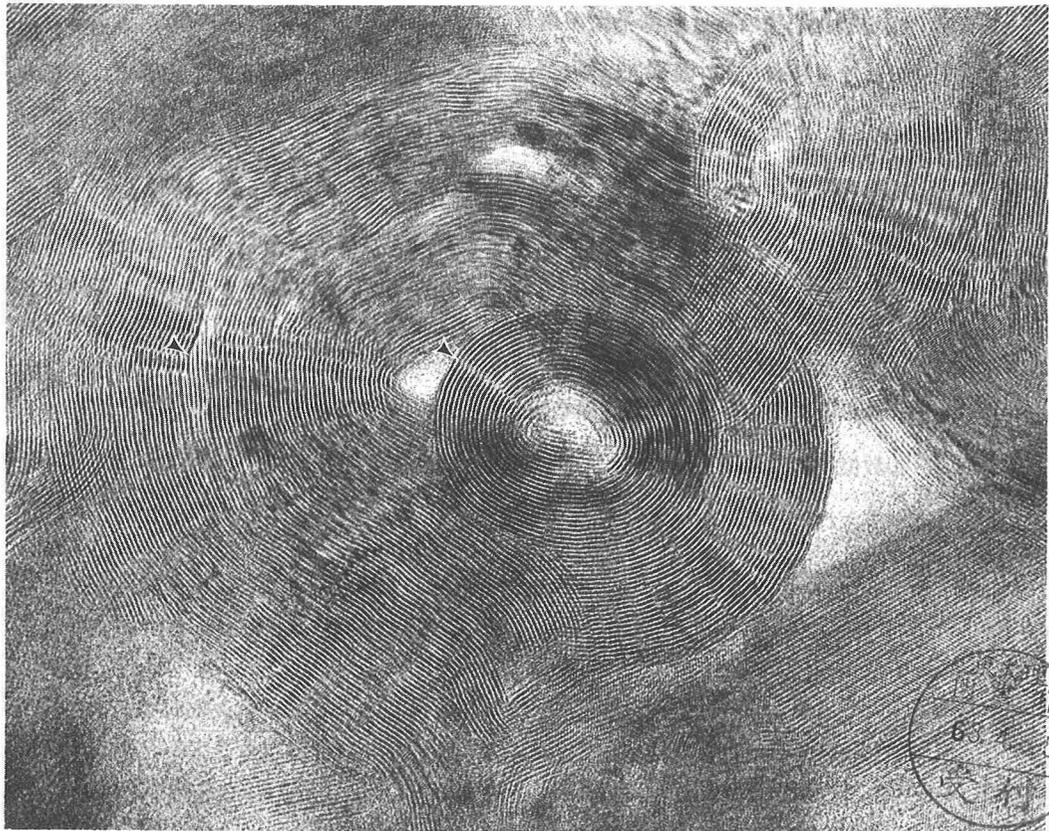


廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明.....	1	自省の弁.....	埴原和郎... 20
近況と雑感.....	2	埴原和郎先生を送る.....	尾本恵市... 22
豊島久真男先生の日本学士院賞受賞.....	4	黒澤幸子博士の御退官.....	岩槻邦男... 23
理学部の将来.....	4	化学教室38年.....	増田昭三... 24
宮澤先生のご退官によせて.....	6	増田昭三さんへの送別の辞.....	内藤周弑... 25
理学部に40年.....	7	理学部所属植物園について.....	水野昌平... 27
佐伯敏郎先生のご退官によせて.....	8	水野事務主任の定年にむけて.....	平原・渡辺... 28
理学部を去るにあたって.....	9	退職に際して一言.....	堀 弘一... 29
朽津耕三先生のご退官によせて.....	10	堀弘一さんの退職によせて.....	田中満嘉... 29
人間と科学と.....	11	ガラスとの出会い.....	平野光康... 30
大木先生のご退官によせて.....	13	平野光康さんを送る.....	清水忠雄... 31
思いつくままに.....	14	竹脇潔先生を偲んで.....	守 隆夫... 32
宮澤辰雄先生.....	15	赤松秀雄先生を偲んで.....	黒田晴雄... 33
鳥雲にゑさし獨の行衛哉.....	17	鏑木先生の思い出.....	堀源一郎... 35
水野丈夫先生の御退官によせて.....	18	理学部中央化構想について	
ご挨拶.....	19	理学部企画委員会建物小委員会... 36	
上田先生の御退官によせて.....	20	理学部消息.....	40

表紙の説明

始源隕石ミゲイ炭素質コンドライトの中に存在するFe-Ni-S-Oから成る層状鉱物の高分解電子顕微鏡像。これは円筒状に巻いた層の積み重なりを円筒の軸方向から見たものに相当する。一つ一つの層（同心円状に巻いた縞）の間隔は約5.4 Åである。像の中のいろいろな所に格子欠陥を見ることが出来る（例えば矢印を示した所）。今の所これと同じ物質が地球上に存在するかどうかは良くわかっていない。このような円筒状の構造を示す地球上の鉱物としては、現在人体に害があるとして悪名高い蛇紋石の一種であるクリソチルアスベスト（石綿）が知られているが、この物質とは層間間隔も組成も明らかに異なる。この物質は約40数億年前、太陽系生成初期に、隕石母天体上で鉄金属を交代変成して形成されたと考えられている。

留岡和重（鉱物学教室）

近況と雑感

飯山敏道（千葉大学理学部）

10年余りの年月を慌しくも、快適に過ぎて頂いた東大理学部とお別れしてから9ヶ月が流れた。

ふりかえてみると、私は理学部の教官、事務官、職員、学生の皆さんの御好意を享受して暮すことができた果報者であったことに気付く。教授会、委員会、その場、その場で思った事を述べさせて頂く私に、好意の眼差しで肯いて下さった先生方の顔が目に浮ぶ。理学部事務局は、私が当面する問題を常に、私の立場に立って考え、解決策を出して下さる世にも稀な所であった。職員、技官各位は、他教室の私であるにも拘らず、技術的な問題で伺いに行くと、持っておられる know how のすべてを教えて下さった。学生諸君は、私のつたない、恐らく穴だらけであったかも知れない講義を聞きに来て下さり、試験やレポートでおたずねした、私の話の内容に対する感想の中で、非常に興味ある反応を示して下さい、楽しい思いをすることができた。こゝに改めて厚く御礼申し上げる次第である。

赴任した当時、あれも実現しよう、これも始めようと思いやりかけたことがかなりある。しかし、やたらと会議、委員会の多いことは、東大も、日本の一般と変わらず、これにふり廻されて、何一つとことんまで成しとげられなかった。まことにお恥しい次第である。これは、私の時間と能率に対する感覚のズレのせいで、自業自得である。もっとも、私と一緒に手を汚し、油まみれになって仕事をして下さった院生、学部学生の方々が、今は一人前の研究者や技師となって、地道であるが非常に興味深い成果をあげ始めておられるのを見ると、“私は私のやり方でよかったのだ”と思うこの頃である。きれいごとを並べさせ、多くの文献の集大成をさせることを佳とせず、小さくても、納得の行く結論を要求したことを悔いる気は毛頭

ない。十指に余る、これらの方の研究成果を伺う度に、嬉しく感謝の気持ちで頭が下る思いがする。

扱て、今居る千葉大学の様子をお知らせしよう。

御承知のように、こゝは新制地方大学の一つである。首都圏にあるが、キャンパスにまだ余裕があり、広々とした感じを与える。校舎は戦後の規格型校舎が殆んどで、趣きがない。中にはすでに傷みがひどく、改築が行われているものもあり、少しアクセントがついて来ている。駒場キャンパスより少し広く、本郷よりはるかに小さい敷地に、法経、教養、教育、工、文、理、薬の7学部が存在している。松戸にある農学部の前身が高等園芸学校であるせいか、学内の造園と保守には多大な努力が払われている。植込みの木々の剪定、落葉の清掃等に働く人々の姿をいつも見かける。

理学部は、数、物、化、生物、地学（含地物）の5教室からなり、各教室は夫々4講座（数学は5講座）。一講座は教授、助教授、助手各一名、従って、理学部の世帯は小さい。学生は、今年から各学科40名/学年となった。この点はかなり不利で、学生ひとりひとりに十分な面倒をみてあげられないくらいが少くない。大学院は、各学科に修士課程があり、更に数物系は工学部の一部と共に物質系の博士コースを形成して今年から発足した。生物、地学は、農学部と共に、環境系として明春（昭和63年）から発足する。

学生達はその知的活動の potentiality と言う面では、東大の学生諸君と同じ位のように思う。修論、卒論、大学院入試でこのことを感ずる。惜しむらくは、入試（学部の）は縦割りの各学科別であるにも拘らず、1～2学年の教養学部の教育と学部のそれとの間のつながりが全くなく、学部でもう一度初歩的な基本を駆け足で説明しなければならぬことである。語学力の不足が目立ち、

文献の解説の指導にかなりの時間を割かねばならない。教養学部のカリキュラムに私達学部の人間が口をはさむことができないことに起因するようである。駒場と本郷の間でも同様な問題があった。こゝでの問題はそれ以上である。

千葉大学における縦割り制度の利点は、むしろ、学生の colleagues 意識の形成が早くから生まれることかも知れない。専門外のことに興味をもたなくなり易い弊もあるが、互助の気持ちが強い。自分の卒論の時間を割いて、級友の実験の手伝いをしたり、3年生が4年生の仕事の一部を分担していることも少なくない。又学生のひとりが病気になるったり、少々落ちこんでしまったりすると、先輩格の数人が、種々面倒をみている。又教官と学生の仲間意識も容易に成立ち、うっかりすると、時間のたつのを忘れた討論、おしゃべりのため、終電ギリギリに駅に駆けこむ破目におちいる。彼等の心の底にある向上心、自分達の教室と言う意識は見逃せない。

これ程愛すべき若人達なのに、世の中は何で東大生と彼等をこうも差別するのだろうか。就職シーズンの間、私はその実態を見せつけられ不愉快でならなかった。“うちは千葉大卒業生を採用しない”と言われて、すすぐ帰って来る学生に、どうして“何故千葉大からは採らないのですか”と聞きなおらなかったのかと何度言ったことだろう。ひどい時には、応募書類の提出を拒否する所すらあった。この屈辱感に身も心も疲れてしまう彼等を元気づけるのに苦労した。

そのような事情も手伝って、教官達の間、沢山の事を教えようと言う気持ちがかかなり強いのを感ずる。4講座の教室に割り当てられている非常勤講師の定員が20名なのに私はびっくりしてしまっただ。授業、授業で学生達に耳学問を強いてよいのだろうか。学生時代に、本当に身につけることが出来たものが、たとえ一つだけであっても、その方が百の知識よりも貴重だと思うのは私だけなのだろうか。今私が持っている know how は、卒業後に独学で、同じ所を何度もよみ返し理解し

たもの、実際に手を汚して得たものであることを思うと、この傾向の効果を疑ってしまう。

研究設備や研究費の状況を少し見よう。校費のうち講座に来るものは、一講座170万円であるから、これは東大と大差ない。しかし科研費として理学部教官が運よく得ることができたものの総計が3千万円前後であるには少々おどろいてしまった。教官数が少いとは言え、貧弱すぎる。会計はすぐ“こゝは東大のように行きません”と言う。教官の一部にも半ばあきらめに近いものを持つられるのを感ずる。機器があっても、これを動かし、保守する費用のうら付けがなくては、これらの機器は飾りにすぎなくなる。私の貧乏根性は、又ぞろ手造りで何とか補おうと、時間の浪費？を私に強い始めている。幸い東大時代に科研費その他で購入出来た機器の一部を移管して頂けることとなる見通しがついたので、これが来るの間もないと思う。曲りなりに、実験室らしい実験室が出来るのもそれ程遠くはないと思っている。

東大でもそうであったが、日本の大学における理科教育は、どうしてこうも Hard ware を強化することに無関心なのだろう。理論と実験は互にもちつもたれつで進むのが常態である。案外、今日本が諸外国から“日本たたき”に会おうとしていることの根源は、この辺りに根ざしているのかも知れない。地味な基礎的研究にはあまり投資せず、新しい技術や機械を外から導入して、生産能率をあげ、我が物顔をして、世界経済を攪乱させているように彼等は思っているのかも知れない。私達理学系の間も、心の奥底にこう言うものを持っているのかも知れない。もっと無駄が出ることを覚悟した研究投資がなされてよいのではないか、否そうあるべきだと私は思っている。

何だか、話が分ずれてしまった。東大のような老舗大学から、ここに移って感ずるのは、あまりにも、皆が、一様に同じになろうとしすぎていることである。地方の新制大学は、すべてが揃っていることは必要でなく、各学科、各分野が夫々特徴を持つことが大切である。東大は東大でよい

所が沢山あるし、そこの卒業生も立派である。しかしそれだけで世の中が成立つものではない。千葉大学はこゝらしい特徴を持つようにせねばならない。

では、どのような点に特徴を持たせるように努

力すべきなのだろうか。思慮の浅い私は、地味な根本的な問題に疑問を投げかけて、試行錯誤をくり返す泥臭さに魅力を感じるが、こゝの定年まで、5年しかない私に何ができるかと不安にもか
られている。officeから見える夕陽が美しい。

豊島久真男先生の、日本学士院賞受賞を祝す

伊 庭 英 夫 (生物化学教室)

本学医科学研究所所長であられ、理学系大学院の指導教官を務められる豊島久真男教授は、去る6月に日本学士院賞を受賞された。豊島先生は、1965年にがん研究の分野に入られた直後から、がん遺伝子 (oncogene) の研究を志ざされ、現在に至るまで数多くの先導的・独創的な業績をあげられ、我国のがん研究の基礎的な面からの研究推進にあたられていてこの分野での中核的な存在と
なられている。

特に、癌ウィルスの温度感受性株を使用してこのウィルスのゲノム中に、細胞の性質をがんに変え、さらにその性質を維持するために働いている遺伝子が存在することを世界ではじめて示した1969年の成果は、がん遺伝子研究の分野で極めて重要な発見であった。これにより、細胞を対象としたウィルス学的、分子生物学的な基礎研究の重要性が示され、その後のがん研究の方向に大きな影

響を与えたのである。また我国で単離されたトリ肉腫ウィルスY73から新しいがん遺伝子 *yes* を発見し、その構造を決定された。先生の解析された他のウィルスがん遺伝子 *erb B* の研究から、この遺伝子が上皮性増殖因子レセプターの遺伝子に由来することが示された事も、我々のがん遺伝子に対する視野を著しく広めた点で、記憶に新しい。

現在、先生は、*src*、*yes*、*erb B*といった癌遺伝子と関連の深いと考えられる遺伝子をつぎつぎに単離し、解析が続けられている。このような「*src*ファミリーがん遺伝子」に対する先生の一貫した研究に対し、日本学士院賞がおくられたのである。理学部一同、豊島先生に心からお祝いを申し上げますと共に、今後の研究ならびに本学系の大学院生の教育に御活躍をお祈りする次第である。

(昭和62年7月31日記)

理学部の将来

宮 沢 弘 成 (物理学教室)

永年住んできた理学部を去るにあたって、これからどうなるだろうかと考えていることを少しのべてみたい。

理学部は大学院大学になるのがよいと考えていたが、全学でその方向に動きつつあることは大変

喜ばしい。この問題は理学部が先頭切ってやらなければならない。また理学部一号館を建て直して立派なものにしたい、改装を断ってきたのだが、これもうまくいくかもしれぬ。もう一つ物理が独立して新学部をつくることも考えたが、これはま

だ目鼻がつかない。

ももとは、大学院大学になり新しい建物をつくるには、本郷でなく新天地がよいと考えた。候補地を探すと、北多摩によいところがあった。東京天文台、その下に調布飛行場（都営？）、その隣に米軍家族住居あとの関東村と、三鷹、調布、府中、小金井市にまたがる地域で全部で300ヘクタールである。これは東大全部が移るのにちょうど良い広さである。台地と平地と間に川が流れて、雰囲気はよい。このあたりは住居専用地区で大学はたてられないことになっているが、大学院ならよかろう。物理の先生の自宅住所をしらべてみると、その重心が杉並区永福町あたりであった。そこからは本郷より多摩のほうが近い。移転反対があるはずがない。こんな案をつくって喜んだのだが、丁度立川移転計画が始ったので、干渉しないようにと教室外公表を控えてしまった。この関東村は何度も利用計画がだされながら、未だに空き地である。現在は某大学の移転がいわれているが、果たしてどうなるか。東大もここへの移転を考えてみてはどんなものだろうか。

大学院という言葉は、大学のつけたりのように適当でない。最高の学問研究所を意味するうまい言葉がないかと古典をしらべると、太学という単語があったが、これは大学と同じだろうか。とにかく大学院よりはもっとよくない。教授に替わるものとして、教え諭し、教え授けるのに対し、教え研究するのだから教研あるいは教究だろうが、どうも響きがよくない。前途多難である。

ところでこれらのことは理学部をなんとか変えたいという発想からであるが、今理学部を離れるにあたって客観的な立場からみると、多少異なった考え方もできる。日本の学界にとって必要なのは大学院を重点とする大学よりは、大学を付属にもつ大学院ではないか（やはり大学院に替わる言葉が欲しい！）。そしてそれは既存の大学をつくり替えるより、全く新しくつくるのがよくはないか。数十年前七年制高校制度が設けられた。その際一高などの既存の三年制高校はそのままにし、

新しく東高などをつくったのだが、これは成功したといえる。

機械などで、老朽部品を取り替えながら使うのは限度がある。ある段階で新品に替えた方が能率がよい。生物がこれをやっている。いつまでも生きようとせず、分身といえる子供をつくってそれに生命を託し、永遠に伝えようとするのである。理学部もその伝統を受け継ぐ分身である理学院を別に新しくつくったらどんなものだろうか（伝統とは何か？）。大学全体が変態するのは慣性が大きすぎてなかなかむつかしい。

生物はさらに高度のことをやる。子供が成長したら親は邪魔だから死んでしまえと、そのような情報が遺伝子に組み込まれているそうである。それが種族の生命を永く伝えるため生物がつくりだした手段なのだろう。理学部にあてはめると、理学院をつくったあと適当なときに解散してしまうことになる。果たしてそれが最善の手段かどうか生物の先生に伺わなければならないが、どうせ死ぬのだから何もしないということにならないのもち論である。寿命までは、必要ならば治療をして、健康に生きなければならない。

制度の改革期を迎えてなかなか大変である。あとの人達しっかりやってくれと言いたいところだが、事態は全然深刻ではないのである。あとが心配で、若いものを頼りなくみるのは老人の通弊である。毎年若い新人が入り、年寄りを定年で追い出すのはやはり生物の原理にあっていることなのだが、若い人は先輩と同様に、それ以上に立派にやっていくのである。理学部は名称は変わっても、その伝統（！）はあとあとまで受け継がれていくことであろう。

永年付き合っ下さった方がたに紙面をかりてお礼申上げる。

宮沢先生のご退官によせて

猪木慶治（物理学教室）

私が初めて宮沢弘成先生にお会いしたのは、先生がシカゴ大学とプリンストン高等研究所における3年間の研究生生活を終え帰国されたばかりの時であった。丁度、先生の助手時代で日本に新しい中間子論、分散理論を育て上げようという意気に燃えていらっしまった頃だと思う。私は当時大学院に入りたてで、素粒子をやるか、原子核をやるかと暗中模索を続けていた時でタイミングよく新進気鋭の先生の教を乞うことになった。

その先生が、本年3月をもって定年退官される。先生は昭和25年東京大学理学部物理学科を卒業されたのち、引続き助手、講師、助教授をへて、昭和43年以来理学部物理学教室の教授に就任された。以後一貫して物理学科の教育、研究の中心的指導者として非常に多くの秀れた研究者を育成された。その間、物理学教室主任、理学部附属中間子科学実験施設長としても多忙な日々をおくってこられた。

先生の御専門は、素粒子物理学であるが、理論物理学全般に御造詣が深く、多くの先駆的業績を挙げてこられた。特に、原子核の磁気能率に関して美しい理論を展開されたのは有名である。またシカゴ時代、ミクロな因果律に基づく分散公式を素粒子物理学における中間子と核子の散乱に対して最初に適用し、その有用性を示されGoldberger-Miyazawa-Oehmeの関係式として一般に親しまれている。そしてS行列理論の推進者としても数多くの業績を挙げられた。その後、ハドロンの世界におけるボソンとフェルミオンの対称性にも先鞭をつけられた。また、クォーク物理の原子核や高密度物質への応用などで面白いアイデアを出しておられる。

何事につけてナンバー・ワンをモットーにされておられるのか、研究室で行くスキーにも山登りにも還暦を迎えられた現在でさえ常にトップにた

ってみんなを引っばって行かれる。1950年代にアメリカで新車を買った日本人としても物理屋の中では、はじめてではないかと思う。

また先生は、自分には厳しいが他人に対してはとて寛大で、学生の自主性を尊重し、独創性を引き出すように指導され無言のうちに教育される。そして叱るよりほめて育てる主義で、数多くの優秀な卒業生を研究者として世に送り出された。また先生の明解な講義に基づく名著「素粒子物理学」（武田暁先生との共著）は、ひろく愛読されている。

御自身の研究ばかりでなく、先生は、素粒子、原子核全般にわたる研究の推進の為、国際理論物理学会議、高エネルギー物理学国際会議、素粒子と原子核国際会議の組織委員として国際交流にも並々ならぬ努力を払われました。更に最近では、国立大学入学者選抜研究連絡協議会会長として、教育問題にも献身的な御尽力を惜しまれなかった。

先生のお若い頃のエピソードを色々と伝え聞いている。モーゼの10戒にちなんでMiyazawaの4戒という「べからず集」がある。それは、「no drinking」、「no smoking」、「no girl」、「no movie」で、この戒律をまもられて勉学、研究に励まれたと伺っている。ある時点で最後の2つの「べからず」は、やぶられたらしい。梅酒をたしなまれるので「no drinking」に抵触するのではないかと思われる方もおありかと思うが、「税金を払っていないアルコールはお酒ではない」というのが先生の定義である。その解釈の類似性から憲法第9条が改正になれば、最初の「べからず」も改正されるようである。

いつまでも若々しい発想をされる先生が、御退官後もお元気で益々御活躍されることを祈って止みません。

理学部に40年

佐伯敏郎（植物学教室）

学生時代から停年退職まで、同じ大学に所属するというのは昔は珍しいことではなかったが、植物学教室では生きた化石の最後として消えていこうとしている。この人世にお礼をいう気分ではあるのだが、その対象は漠然として不明である。それでも多くのことが東大理学部と結びついていることははっきりしている。

終戦を界に世の中は「軍人の時代」から「知識人の時代」へと移りかわった。昭和22年に仰ぎみた東大理学部は20才の青年にはこれからの活躍の最高の場と思えた。

助手の時代には理学部の研究を支えるものは助手層であるという合言葉で張切った気分であった。今の助手層は理学部の研究水準を保つ上でどういう位置を占めているのであろうか。独創性が特に重視される理学部では、経験の蓄積がものをいう分野と違って若い人に期待する部分が相変わらず多いようにもみえるし、少し変質してきた感もくはない。

教授になってからのここ10年ぐらゐの間、我々の研究室にやってきた若者たちは大へん優秀であったから、放っておいても順調に育った感がある。こちらはぜんぜん邪魔をしなかったという程度のことしかやっていない。いい素質を持った学生をとりたいという希望は広く学部内に滲透しているようである。成績の良い学生はたしかに受験競争の弊害に染まっていない。個性の多様さも十分にある。問題は彼等が研究者をめざして大学院にはいつてからではなかろうか。

助手になってからの公務的雑用の何と多いことか。そうした事をヨーロッパあたりで話してみても、とても信じてもらえないそうである。科研費獲得力の高い教授のところでは、それを補償するかのよう助手も大へんになる。本来協力関係に

あるべき研究室で事態は競争的部分がはいってきているのではあるまいか。時間という限られた資源の取り合いという意味の競争である。

外国の大学・研究所での経験を積んだ人が最近が多い。私が驚くのは研究室を支える西欧の体制とそれを維持しようとする精神の一樣さである。西洋人の議論好きはあきれるばかりで、どうやって自分の個性を売りつけるかに心を砕く。そして輩出する個性はたしかに多様である。それに対して研究室体制のあり方についての感覚の一樣性はどうしたことか。私の数少ない知識でもヨーロッパ、カナダ、それにオーストラリアにおいても大体同じである。各国の個性は非常に少ない。研究をすすめるにはこれしかないと共通に信じているようである。それに比べて日本の何と個人的なことか。明治の頃には一応模倣をして西欧に近かったのかもしれないのだが、除々に日本的に変質して現在に至っている。それをほめる外人が果しているであろうか。

外国では勉強と討論と研究計画・取りまとめといった研究に直結し、しかも他人にはまかせられない部分にだけ精力を集中しているのに対し、日本の実情はそれらにさく時間の捻出に苦勞しているのである。

好調な日本経済のために、研究費の増額は可能とみて、多くの力はそこへ向かっている。しかし、研究補助者についての西欧的常識は完全に無視され、日本の個性ある方式がまかり通る。その結果出される定員削減には抵抗できない現状である。

日本である分野の初の国際学会があった際言われたという「日本人はなかなかよくやっている。しかし、彼等がいなくても学問の進歩は少しも損なわれないであろう」という言葉はどうであろう。今でも成立する分野があるのではないか。

ある新鮮な分野開始点には必ず外人の名前がある。そこに群がった連中のなかにいい研究をする日本人も含まれる。準一流とはこういう人といったらよい。かなりの優秀さを発揮できなければ準一流にはなれないから、それはそれで立派なのだがそうした人ばかりでは困る。

日本の研究者は研究の内容にふれる時間の少なさに対してどのように順応してきたか。それは間

口をせばめることによってである。広く浅くなくなってしまふより、それなら恰好がつく。だがこれでは新しい分野の開拓などにはとても及ばないことはすぐ分る。超伝導ブームの昨年、ノーベル賞がそのために一つの席をあけてあるとのことであった。「だったら一番ノーベル賞らしくないですね」と話し合ったことがある。実際は発端の人にいったわけでノーベル賞らしい結果になった。

佐伯敏郎先生のご退官によせて

高橋正征（植物学教室）

佐伯敏郎先生は本年3月に定年退官されることになりました。佐伯先生は昭和25年3月に東京大学理学部植物学科を卒業された後、同大学院に進学され、門司正三教授のもとで昭和35年に理学博士の学位を受けられました。昭和29年4月に理学部助手として任官、植物学教室に勤務され、昭和50年4月には教授に昇任されて植物学第4講座生態学研究室を担当されました。

佐伯先生は昭和29年に門司先生と共著で“植物群落内の光条件とその物質生産に対する意義”と題する論文を発表されました。この論文は、それまで社会的アプローチが主力であった植物生態学の分野に、新たに生長現象を基礎とした物質生産アプローチを提案することになり、内外の研究者の絶大な評価を受け、今では世界的な古典となっております。物質生産アプローチによって、それまでは単なる相関関係でしか把握できなかった植物の生活と環境作用が、明瞭な因果関係を背景とした定量的把握へと発展し、生態学諸現象の解析を飛躍的に発展させたことは余りにも有名です。以来30余年を経た現在でも物質生産アプローチは健在で、世界中で数千人にのぼる研究者が精力的に研究を進めており、その影響の大きさを示しております。これらの業績に対し昭和53年に朝日賞が贈られました。また、この偉大なお仕事が、卒

業研究として進められたものということで、佐伯先生の非凡な才能をうかがい知ることができます。こうした偉大な研究業績を残された背景には、先生のもっておられる強力な集中力が大きく働いていると推察いたします。先生は腕組みをされて、何時間も何時間も廊下を往ったり来たりされながら考えこまれたり、乗車された電車が終点について折り返しているのにも気づかずに考えに夢中になられたり、という佐伯先生ならではの行動やエピソードをたくさんおもちです。

大学教官は研究者、教育者であると同時に、教室など学内の、あるいは学会をはじめとした学外の諸設をこなすことも重要な仕事で、大方の人が何気なく処理してしまうようなことでも、佐伯先生はとても気をつかわれながら処理されていたようです。教室主任をしておられた時には、入試の監督などはまずご自身を選ばれて、他の人に依頼する分を極力少なくされたのなどその一例で、これは先生の律義で、はにかみやのご性格によるところが大きいようです。ご定年とともに多くの役職から解放されるので、それを1日千秋の思いで待ってられるのも先生のお人柄です。ただ残念ながら諸役からの完全解放というわけにはいかず、例えば昭和65年に始めて日本で開催される国際生態学会では実行委員長を務められるなど、ご定年

後もまだ大きなお役がいくつか残っております。

4月からは新設学部で教育と研究を続けていかれることになっていると伺っており、先生ご自身も、4月からは特に研究活動に多くの時間がとれそうだと、期待しておられます。先生が研究に熱中しておられるお姿を拝見しておりますと、研究活動が若い世代の特権のように思われている世の中の固定観念が先生には全く当てはまらず、現在

でもなお若々しく、独創的な研究をなさるに十分な気迫をお持ちです。学会のご講演で数多くの聴衆をひきつける強力な魅力をもっておられることから、それをうかがい知ることができます。雑務から解放されて、もう一度生態学の深奥に迫る偉大なお考えをご呈示下さることを期待しつつ、先生をお送りしたいと思います。

理学部を去るにあたって

朽津 耕三 (化学教室)

今春でちょうど40年を理学部化学教室で過ごしたことになります。3年ばかり外国に行っていましたので、その時期を除くと、今までの人生の60%以上になります。このすばらしい研究教育の場に身を置くことができたのは、私にとって無上のそして過分の幸運でした。感想はこの一言に尽きます。その間いつも忙しく働いていたような気がします。特に最近の1年はそうでした。よく体を壊さなかったと自分で感心しています。理学部長としては、力不足で皆様にずいぶん有形無形の御迷惑をかけたのではないかと案じています。しかし、有馬前学部長、藤田・宮澤両評議員、野島事務長をはじめ教官職員の皆様の御支援によって、何とか終を全うできそうです。心からお礼申し上げます。

私が化学に引きつけられたきっかけは、色の変化の美しさでした。さまざまな物質が示す変化の手品を見るような面白さが、いつも私の研究の推進力になっていたようです。物理化学を専攻したのも自然のなりゆきで、自分の適性と嗜好に最もよく合っていたような気がします。森野研究室に入ったとき、先生から電子回折をテーマとして与えられましたが、電子回折の誕生もちょうど私と同じ1927年だったのは奇縁でした。その後ずいぶん長いあいだ電子回折とつきあいました。“分

子の形と動きを決めるものは何か”を追求しているうち、“分子振動の非調和性”という問題にぶつかりました。自分がひとつのイメージを作り出したつもりになっていたら、ちょうど同じころチェコとアメリカの研究者がほとんど同じようなアイデアを持っていたことを知りました。水島・森野両先生が主催された1962年の東京国際会議で3人が集まったとき、“われわれは決してanharmonicにならないで、harmoniousに研究交流を進めよう”と誓いあいました。その言葉どおりに仲よく研究が進められたのはよい思い出のひとつです。研究テーマはしだいに“分子の激しい動き”に移って、化学結合が切れたり、電子が飛び出したりするような現象を色々と手がけました。これらの研究は、近藤助教授をはじめとする研究室の皆さんの活躍によるものです。また、ふとした契機で分子研の廣田栄治教授らと気体分子の構造定数表(Landolt-Börnstein Tables)2巻を作り、また単位と記号の標準化に関するIUPAC委員会や日本化学会の仕事にかなりの時日を使いました。研究やこれらの作業を通じて外国にも多数の親友を持たたことは、かけがえのない喜びです。気体分子、とくに励起状態の構造と動力学は、レーザーやコンピューターの発展によって大きく変貌しつつあります。今後が本当に楽しみです。

量子化学と分子構造論などの講義も、無上の楽しみでした。講義を始めてまもなく、幸運にも You and Your Students という本に出会いました。これはMITで教師のために作った小冊子で、講義計画の立て方、黒板の使い方、試験のしかたなどごく当たり前のことばかり書いてあるのですが、この本を読んで耳の痛い思いをしない先生は稀でしょう。私はなるべくそれらの注意を忠実に実行しようと思いました。最近、教育学部で理科教育の講義を担当できたので、教職を志す学生諸君にこの本の内容を紹介しました。このほかに、学生諸君の進路指導に一喜一憂した日々が心に残っています。

ただひとつ、残念でないことがあります。それは、御殿下運動場がこの数年は使えなくなって、草野球ができなかったことです。私の部屋はちょうど運動場を見下ろす位置にあるので、空いているときを見定めるのには好都合でした。また暫くしたら体育館が完成して、運動場も復活するのでしょうか。そのときには、もう一度一塁を守ってみたいと思っています。どうぞ声をかけて下さい。

理学部の皆様、本当に長いあいだ色々とお難うございました。皆様の御活躍と理学部の御発展を切に祈ります。

朽津耕三先生のご退官によせて

近 藤 保 (化学教室)

朽津耕三先生は昭和26年東京大学理学部化学科を御卒業後、東京大学大学院を経て東京大学理学部助手になられました。その後同講師、同助教授を経て、昭和44年に物理化学第三講座担任の教授に昇任されました。その間、教育計算機センター長、大学院協議員、評議員をはじめ多くの要職につかれ、現在は理学部長です。また先生は国際結晶学会連合、国際純正・応用化学連合でも活躍されています。朽津先生の研究を一貫する特徴は気体分子の様々な性質を調べる手法として電子を用いることにあります。光(電磁波)を用いる化学の分野は分光学や光化学として発展し大きな分野を形成しております。先生は電子と分子の相互作用が光と分子の相互作用と著しく異なっている点を鋭く見抜かれ、光を当てたのみでは知ることのできない分子の一面を電子を用いて切り出し、「電子線の化学」と呼ぶような化学の新しい研究領域を開拓されました。この業績により、昭和37年日本化学会進歩賞、昭和47年山路自然科学奨学賞、昭和57年日本化学会賞を受賞され、また今年度

の東レ科学技術賞を受賞される予定です。

そのような先生を、皆によく知られた人物に擬するとどうなるか、という話が出たことがあります。帰するところはシャーロックホームズ氏ではないかということになりました。ホームズ氏といっても、人によってそのイメージが違ふと思いますが、最近テレビで活躍しているシェークスピア俳優ジェレミー・ブレッド氏の扮するホームズ氏のことを皆はイメージに描いているようです。その意味するところは、信義に厚く繊細で慎重、緻密で完璧主義、博覧強記で好奇心旺盛といったようなところかと思えます。事柄に当たるときの徹底ぶりは多くのエピソードを生んでいます。ある大学院生の持参した論文の下書きが、原形を止めないほど朱筆で直され、自分で書いたもので残ったのは固有名詞だけであったという話も伝わっています。ところで、先生は“black book”といわれているものを持っておられます。これは海外出張で出会った外国人のサイン帳です。日本を訪問した外国人のサインや短い文章も書き記されてあります。

以前にサインしてもらった人と再会したときなどには、古いサイン帳を見せて驚かせたり、なつかしがらせておられます。私の知る限りでは、このようなサイン帳を長年にわたってつけている人はあまりないのではないかと思います。

ホームズ氏が教育熱心であったかどうかは知る由もありませんが、先生は非常に熱心に学生や後進の指導に当たられました。多くの学生が先生の部屋を訪ね、悩みを打明けたり、将来の進路について相談したりしている姿をよく見かけました。また、現在あれほど御多忙であるにもかかわらず100人を超える学生のレポートや試験答案のすべてを隅々まで目を通し、朱筆で細かく直し、感想まで書いておられました。とても常人にできることではありません。先生のなさっている量子化学の講義に対して、多くの学生が感想を寄せております。「豊富な事例、丁寧な板書などを駆使して行なわれ、難しい概念も論理的にかつ定性的イメージをもって頭に入ってくる」などとその講義を評しています。「好奇心旺盛で自然を探求するロジックを愛する若い頭脳を育てたい」という先生の情熱が学生達に伝えられている様子やその名講義を惜しむ学生たちの気持ちをその感想の中から強く感ずるものでした。「勉強とはトンネルを通過するようなもので、ありがたみ（明るさ）が見えるには時間と努力が必要」と思っている学生もありました。「わかる講義」の重要性を、身をもって示されたのだと思います。東大新聞（通算第2646号）「新学部長にきく」という欄で、先生は

「進学したてのころは無気力に見えた学生が、ふとあるテーマを見つけると脇目もふらず没頭するようになる。そういう姿を見る時が一番うれしいです」と言っておられます。

朽津先生は、助手に奉職されて以来32年間、公用出張を除いては日曜日も含めほとんど休まれたことがありません。すらりと伸びた体で勢いよく自転車を漕ぎながら大学にやって来られます。先生が御多忙にもかかわらず、病気一つなさらないのは、このような毎日の計画的なトレーニングのためでしょう。学生のころバスケットボール選手であったとのことで、スポーツ好きも有名です。昔からつけておられる野球のスコアブックには、日本石油時代の藤田元司投手（そのあと巨人）がどのように打者に対したかまで記録してあります。また先生は両国近くで生まれ育たれたため、大相撲もお好きです。

先生はスポーツを通してチームワークの重要性を学ばれたということです。「チームメートにベストのシュートをさせることに徹する。」というのが先生の哲学で、我々研究チームを指導される基本方針であったように思います。「君、どう思う。僕にはこの問題についてはあるイメージが頭の中にあるのだが」というお話を伺いながら、年月は夢のように過ぎ去り、先生をお送りする時を迎えました。先生の研究や教育に対する御尽力に感謝するとともに、今後の幅広い御活躍と、ますますの御発展を期待致します。

人間と科学と

大木道則（化学教室）

科学は非人間的であると言われることが多いようです。この小文のタイトルも人間と科学との対立について記述するのかと思って下さった方があるかもしれません。しかし、私の意図は、科学も

実に人間的である点を述べようとしているのです。

科学が人間性と対立すると言われる主な理由は、科学が論理性を大事にし、人間的な情感の入ってくる余地がほとんどないからでありましょ

う。そう言えばたしかにその通りなのですが、しかし、その科学を作り上げているのが、人間であることも確かであります。だからこそ、科学はあくまで真実に近づくものであって、真理そのものではないと言われるのでしょうか。そして、科学の応用としての技術に限界があることもよく認識されています。有機化合物の名前の付け方にも人間の生活経験から来るものが多く見られます。これは、複雑な化合物の名前は長すぎて困るからですが、最近で言えば、手提げの籠の形をした化合物にバスケットンという名前を与えたのなどは、その好例です。昔は、名前をラテン語やギリシャ語に求めたことが多かったのですが、このごろ英語がもとになるものが多いのは、化学者がヨーロッパの古典語をあまり勉強しなくなったせいでしょうか。

ご存知の通り、科学が基礎となった医学の進歩は、このごろ著しく、医学の倫理がしばしば問題にされます。理学部に関係のあるものとしては、遺伝子組換えの研究なども、近い将来この種の問題に真剣に取り組まなくてはならないかもしれません。科学の進歩が、科学の研究の中に、情感の問題をも考慮しなければならなくさせたと言っただけでよいでしょう。

このようなことを言うと、理学部で行われている研究は、基礎的なものだから、そんな心配はないし、そんなことを考えること自体、学問の妨げだとお叱りを受けるのが、目に見えるようです。しかし、私は、科学者といえども人間であることには変わりがなく、科学者も時には人間であることを考えてみるのもよいことではないかと思っています。

科学者は、自分の研究に没頭していればよいのであって、科学以外のことを考えるのは時間の無駄使いで、研究の妨げになるというのが日本人研究者の一般的考え方だと思います。はたして本当にそうなのでしょうか。私も、そのような研究者がいることを否定するものではありませんが、外国の一流の研究者の生活を見ていると、そうでな

い人の方が多いように思えるのです。余裕を持って研究をしている方が豊かな発想がわいてくるということもあるのではないのでしょうか。論語に、鶏頭となるとも牛後となるなかれ、という文章があることはよくご存知だと思います。これは、本質的には鶏頭も牛後もよくないのだけれど、どちらにしかねないのなら、まだ、牛後よりは鶏頭の方がましだということなのでしょう。日本の研究を見ていると、いかにも牛後が多過ぎるような気がしてなりません。理学部にはもちろんそんな方はいらっしゃらないわけですが、鶏頭でなく牛頭を狙うとすれば、時には完全な発想の転換をするために、自分が人間であることを思い出してみるのがよいのではないのでしょうか。

人間としての生活と、研究者としての生活とははっきりと分けることは、もちろん困難なことですが、割り切ってしまうばできないこともないと言うのが私の実感です。ご存知の通り、アメリカでは、今でも華氏の温度やヤード、ポンドを生活では使います。私は、最初にアメリカに留学した時、これがいかにも不思議で、同室の学生の何人かに日常生活と研究室の生活とで、同じものを、違う単位で話さなければならぬことの不便さについて質問しました。答は簡単明瞭で、体温や気温と実験室で測る温度とは全く別もので混同する恐れは全くないのだということでした。彼らにそういうことが可能なら、我々にもそれは可能なのではないのでしょうか。

私の尊敬する何人かの科学者から、研究のテーマについて同じことを聞いた経験があります。それは、凄いアイデアが浮かんだとしても、一晩たったら忘れてしまうようなものは、結局凄くないのだということです。良いアイデアも、しばらく寝かせて、学問的にも人間的にも冷却期間を置いてから研究にとりかかるのも良いのではないのでしょうか。

だからこそ、お前の研究はたいしたことがなかったという声が聞えてくるようです。理学部を去るにあたっての私の妄言としてお許し下さい。

大木先生の御退官によせて

中村 暢 男 (化学教室)

大木道則先生は、本年3月定年退官されることになりました。昭和37年4月34才の若さで理学部教授になられて以来26年、研究、教育、行政の多岐にわたり活躍され、国内のみならず国際的にも評価を受けてこられました。

先生は昭和25年3月東京大学理学部化学科(漆原研究室)を御卒業になり同年東京都立大学に赴任されました。昭和28年には「発情化合物の合成研究」により分子構造と生理作用の関連性を実証し、日本化学会進歩賞を授賞されました。また、博士研究員として米国留学中には、窒素から炭素への分子内C-T相互作用の存在を実証する有名な業績をあげられました。

御帰国後、都立大学助教授をへて化学教室に移られ、初め有機化学第一講座を担当されましたが、先生の厳しいお人柄の故か、周囲には厳肅な雰囲気が多い、多くの人々は畏怖と畏敬の念で先生に接したようです。昭和40年3月に物理有機化学講座が新設されると同時に、新講座を担当されることになりました。

その当時、先生が持ち続けられていた夢(目標)の一つに、新しい回轉異性体、とくにエタン型の炭素炭素単結合に関する回轉異性体を単離することがあり、様々なアイデアの下で多くの努力が続けられていました。その頃以来現在まで、先生がよく口にされる言葉に、「捨てるのはいつでも捨てられますから」というのがあります。これは、目標に急ぐあまり、反応の物質収支を確認せずに廃液と思われる部分を捨ててしまう学生を諫めるときにお使いになりますが、そのほかの面でもなかなか含蓄のある言葉のようです。この精神は、最近の7、8年間に行なわれている回轉異性体の反応生成物の検索の際にもよく生かされ、微量成分の捕捉へとつながっているようです。

このような中で、9-置換トリブチセンや9-アリアルフルオレンを用いる系が最良であることがわかり、回轉異性体の合成・単離、回轉障壁の決定、回轉異性体の反応性、異性体平衡比から弱い分子内相互作用の検出へと飛躍的に研究が進み、昭和55年「有機化合物の配座固定と変換に関する研究」によって日本化学会賞を授賞されました。

先生は研究の御推進に当たり、UV/VIS、IR、NMRとその時その時の先端的な手段を駆使され、とくにNMRでは、時間項を含むスペクトル解析で理論の検証と応用につとめられ、所謂Dynamic NMR法の信頼度と応用性を高められました。また、化学教室に60~270 MHzのNMR分光器を導入され、教室員に解放されたことは、研究のスピードアップと発展のために大変プラスになったと思われます。また、現在では有機化学者の間で非常にポピュラーとなった「分子力学計算」に関しても、10年以上も前にいち早くその有用性に目を留められ、積極的に紹介されたこともまだ記憶に新しいところです。

一方、先生は化学教育・行政に関しても活躍され、日本化学会化学教育委員会、学術会議、IUPAC、ユネスコなどの委員を勤められました。その間、CBA化学、CHEMS化学の紹介をされ、昭和44年には学術会議会員に最年少で当選されました。さらに、学術会議科学教育小委員長、文部省学習指導要領作成協力者、理科教育・産業教育審議会委員、教育課程審議会専門委員、教育課程審議会委員、学術審議会専門委員、日本学生科学賞審査委員長、井上科学振興財団選考委員長、東レ理科教育賞審査委員なども歴任されています。先生は学内でも各種委員会の委員を勤められ、大学紛争当時は評議員として苦勞されました。最近

では、化学新館の建築にあたり大変御尽力され、旧館東・北側当時とは比べものにならないほど安全な実験室を提供して下さいました。

先生のお部屋は、化学新館の5階にあります。エレベーターを使われることは殆んどなく、階段を上り降りする御姿には強固な信念が感じられ、一種の敬服の念を禁じ得ないのは、筆者のみではないと思われまふ。先生のもう一つの口ぐせは、「化学者は面倒くさがってはいけません」という

ものです。これは、化学本館玄関にある各自の名札の管理をキチンとしなさいの意でおっしゃるときのもので、やはりそれだけに限らない含蓄のある言葉のようです。アイデアをすぐに文献のチェックや実験にうつす実証的な態度を常に求められているようです。

御退官後は、岡山理科大学で御研究を続けられるそうですが、新しい夢の実現にむけて活躍されることをお祈り致します。

思いつくままに

宮澤辰雄（生物化学教室）

理学部を意識したのはいつ頃であったか、と考えているうちに、それからそれへと遡って、高校2年のとき勤労働員で、大型トラックを運転していたことを思い出しました。その頃は、開成学校工科（工学部の前身）に学んだ祖父の影響で、航空学科に進むつもりでしたが、暑い夏の日に戦争は終わりました。翌年の春にテニス部が復活してからの半年は、毎日もうれつな練習でした。10月の全国高等学校大会（東日本地区）で、決勝まで進んだのは若き日のよい思い出です。その後、大学受験に気持ちを切りかえ、依然として工学部を志望していましたが、先輩・級友よりの勧めで理学部化学科に替えました。前期（1年生）の学生実験の合間（？）に、母校にコーチに行ったりしましたが、秋に、後輩とのシングルの練習試合に負け、ようやく化学に専念する気になりました。

水島三一郎先生の研究室で、直接には島内助教よりご指導を受けました（島内先生については理学部広報8巻7号）。「学生の指導のしかた」まで教わっていたのに気がついたのは、かなり後のことです。昭和30年に化学科助手に採用され、物理化学学生実験の何項目かを分担する他は、研究に専念できるという恵まれた状況でした。タンパク質の赤外吸収の研究で、まとまった成果を得ら

れたのは、舶来の重水（当時は超貴重品）と自記式赤外分光光度計（輸入第1号機）をかなり自由に使わせて頂いたおかげであります。

そのうち米国へ留学ということになり、急いで学位論文をまとめ、急いでお見合いをし（翌日プロポーズ）、新婚の妻とともにやっと一息ついたのは、横浜で氷川丸に乗船したときでした。3年間の留学のあと、大阪大学蛋白質研究所に赴任しました。振動分光学的研究グループを担当し、この分野ではわが国で最高の機器を整備し、30才台の若いときに、意欲のある大学院学生と共に研究に専念でき、たいへん恵まれていました。

大阪で万国博覧会のあった年の暮に、とつぜん、久保先生（当時理学部長）よりの連絡で、生物化学科に移る話が始まりました。結局、併任で生体物質化学講座の担当をお引受けしたのは、理学部がやはり私の母校であったからです。

理学部に戻ってきて驚いたのは、共同利用研究所とのあまりもの格差でした。併任して、直接に比較しやすかったのであります。それでも、昭和49年より生物化学科に専念することを決心しました。まもなく51年には、久保先生と植村理学部長の格別のご配慮で、わが国では初めて、パルスフリー変換の超伝導核磁気共鳴測定装置が、

生物化学科に設置されました。その設備費の申請に、田隅助教授（まもなく化学科へ栄転）の果たされた役割は忘れ得ないものであります。

なにせ、輸入第1号の高性能装置でしたので、学内はいうに及ばず、ひろく全国の国立大学研究者の要望にも応えて依頼測定をしました。私も、この装置のオペレーション（と液体ヘリウムの補給など）をしましたが、ジクロロベンゼンで分解能0.05ヘルツのチャンピオンデータを得たことなどは、楽しい思い出であります。

そのうちに、化学科から迎えた荒田助教授の免疫グループ、東島博士のペプチドグループ、横山博士の核酸グループの構成になり、研究室内で野球のリーグ戦ができる人数になっていました。一昨年には大異動があって、荒田助教授は薬学部、東島博士はテキサス大学に栄転しました。それ以前より、核酸グループでは、タンパク質の生合成（とくに遺伝情報の翻訳）システムの動的構造と機能制御についての研究に取り組み、3年間の研究プロジェクトの申請が、特別推進研究として幸

に採択されていきました。定年を控えた私が、最高に幸せな数年間を送ることができたのは、研究費に恵まれていたとはいえ、やはり、横山博士と意欲的な十数名の学部・大学院学生が次々により研究成果をあげるのを見ていたからであります。

さて、私はクルマの運転とテニスには多少の自信があります。生物化学教室への置き土産として優勝カップを用意しましたが、昨年秋のテニス大会の後で、そのカップは私の手許に戻りました。やはり、若いときに「からだで覚えた」ことは、還暦を迎えたいまでも根づいているように思いません。実は、ここで強調したいのは、よい環境での若いときの学問の修練が、研究者にとっていかに重要であるかということでもあります。その点で、共同利用研究所と学部との研究設備や研究費の格差が、むしろ拡大する傾向をみせていることは、憂慮にたえません。この際、理学部に学ぶ後輩の大学院学生のために、制度としても大学院を抜本的に改善する方向で、理学部の先生がたに、いま一層のご尽力をお願いしたいと思います。

宮澤辰雄先生

横山茂之（生物化学教室）

宮澤先生は、昭和25年に理学部化学科を卒業され、大学院において水島三一郎教授のもとで、タンパク質関連分子の立体構造と振動スペクトル、タンパク質の赤外吸収スペクトルの研究をされました（昭和35年、日本化学会進歩賞）。昭和30年に化学科助手（31～34年、カルフォルニア大学、ハーバード大学に留学）、34年に大阪大学蛋白質研究所助教授、39年に教授に昇任され、タンパク質主鎖の立体構造の赤外吸収スペクトルによる解析法を確立し、高分子の立体構造に関する理論式を導き、振動スペクトルと物理的性質との関連を解明されました（48年、山路自然科学奨学賞）。

昭和46年に東京大学理学部生物化学教室を併任

され、49年より専任になられました。田隅三生先生（現在、化学教室）、高橋征三先生（現在、日本女子大学）、稲垣冬彦先生（現在、東京都臨床医学総合研究所）らと、核磁気共鳴（NMR）により、水溶液におけるペプチド、ヌクレオチドなどのコンホメーションを決定することに取り組みられました（55年、日本化学会学会賞）。私は、ちょうど宮澤先生が生物化学教室に専任になられた49年に、卒業研究で御指導を受け、それ以来、ずっと今日までお世話になってきました。

宮澤先生のお仕事ぶりは、集中して、かつ、それを持続させる、まさに、「がんばる」という感じでした。論文を仕上げる時などはいつも、「今

日はここまでやると決めた」というところまで、何日も夜12時過ぎまでやっておられました。この数年、日曜日に研究室でお顔を拝見しなかったことは、ほとんどありませんでした。時々のテニスと、御自宅との往復の運転（5分ぐらい）だけが、息抜きの時だったのではないのでしょうか。先生は「教育は背中でするものだ」とおっしゃいますが、それは「自分のようにがんばって仕事をするように」ということなのだと思います。

実験室をきれいにすることまで、身をもって実行されました。床磨きや窓ふきも先生の特技で、教授室はいつもピカピカでした。実験室があまりに汚れてくると、先生は、いつのまにか、実験室の床の一角だけを、見本としてピカピカに磨いて下さるので、それに気づいて、あわてて研究室総動員で床を磨くということがよくありました。

先生は、「自分は一点重点主義」とおっしゃって、その典型は、先生によると、女性は奥様、スポーツはテニスということ。かなりの凝り性で、最近、パソコンのリレショナルデータベースに凝っていて、会長を務められた分光学会の会員管理、研究室の会計などのプログラムを御自分で作ってしまわれました。「完璧主義」で、論文も実にきちんと作るのを好まれました。

先生は、英語がとても達者で、書く方も、話す方も、たいへんなものです。われわれが日本語で話している時に、英語の単語を日本語風に発音してしまうと、先生は、「英語で話すときにもそのくせがでてしまうから」と、必ず直されました（「ツー」でなく、twoなど）。先生の英語の講演は、とてもみごとでしたが、2～3週間前から

きちんとした原稿を作って、それから、毎日、少しずつ改良しておられたようです（日本語の講演でも同じでした）。ところが、本番の講演では、原稿をそっちのけで、調子に乗ってしゃべってしまわれることもあったようです。何につけても、先生の準備の良さは抜群で、あまりに用意周到なのでおどろくことがしばしばでした。しかし、先生の用意周到さは、むしろ、細かいことの心配をせずに、思い切ってやるためなのだと思います。

研究方針でも、思い切った方向転換をされて、みな驚かされました。あれほど大きな業績をあげられた振動分光学からはすっかり遠ざかり、「今の目的にはNMRの方が適当である」と乗り替えてしまわれました。このごろは、「どのような生命現象を解明するかという目的をもって、それに必要なことは何でもやるのが重要であって、物理化学だからやるとかやらないとかいうのは意味がない」とおっしゃいます。研究テーマを考えて先生にお話すると、「やりたいならいい。だけれどどういう意義があるのか」と必ず質問されました。はやっているから、はやいそうだからやるというのがお嫌いで、独自の目的、意義などをはっきりさせていないと厳しく叱られました。そのかわり、難しいテーマでも、目的がはっきりしていれば、がんばるように励まして下さいました。

このような先生の研究に対する姿勢は、先生御自身の歩んでこられた道に、まさによく現れていて、先生は、いつも自信を持って「背中で教育して」下さっているのだと思います。宮澤先生、本当にありがとうございました。いつまでもお元気で、これからも御指導をお願い致します。

「鳥雲に^{ひとり}ゑさし濁の行衛哉」

水野丈夫（動物学教室・臨海実験所）

いつの間にか本郷での41年が経ってしまった。高校生だった私は、終戦後間もなく開かれた東大の公開講座に出席した。その折りにたまたまシェパーマンの実験発生学なるものを聴講したが、理学部とのそもそもの縁である。生まれて初めて聴くオルガナイザー（形成体）作用の話は私の心を打ち震わし、夕暮の本郷通りを友人と二人で歩いて帰る道すがら、エマオへ向かう弟子たちのように、胸が熱くなったことを思い出す。しかし、その折りの新進気鋭ながら瘦せたソクラテスの如き講師が藤井隆先生であり、やがて先生に一生師事することになることは、知る由もなかった。理学部に入り、3年生になって卒業研究のテーマとして形態形成の研究をしたいと合田得輔先生に申し出たところ、「形態も大切だが、機能も重要で、両者は紙の両面の如きものであるので、どちらも研究する必要がある」といわれた。これら二つのことは、自分の研究の発端ともなり、また、その後の動物学第2講座の研究の発展に大きなインパクトを与えるものとなった。

いわゆる東大紛争では、比較的冷静だった理学部でも培養室のガラス窓を破って投石がとび込んでくるようなことがあったが、紛争が終焉に向かうや、このようなときこそ大切な学問をするようにとフランス留学を命じられた。フランスへ行ってみると、いわゆる五月革命はあとかたもなく静まっており、所長のヴォルフ教授が毎木曜日の夕方になると必ず研究室に現われて、判で押したように「何か新しく、よい発見をしたか」と尋ねられるのであった。ヴァンセンヌの静寂な森の中にあるその研究所では、当時（そして現在もであるが）人真似でない、しかも、質が高い、という2条件が揃う発見が毎日のようにされていた。

帰国後は新しい研究網が第2講座にしかれた。摩訶止観に「一目之羅不能得鳥、得鳥之羅唯一目」（羅は鳥を捕らえる網）とあり、この文のこのころを詠んだという「鳥雲にゑさし濁の行衛哉」との句は折にふれ私を励ました。

そして歳月は巡って停年を迎えようとしている。これまで行ってきた器官形成における組織間相互作用の研究によって、自然の神秘を垣間みることができたのは計り知れないほどの恩寵であったと思っている。その間に細胞分化を伴わない形態形成が見出され、片面しかない紙がみつかった。もとよりこれは海浜の真砂の一粒に過ぎないわけで、なすべきことは山積している。これからも理学部の優れた若い研究者諸兄が強力で自由な研究を押し進められるよう期待してやまない。

一方、臨海実験所は創立100年以上を経たいま、建物の新築や諸磯湾口の防波堤計画などの諸問題を抱えているが、我が国における海洋生物学研究の最先端の場として発展させたいし、また、理学部が誇りとする附属施設であらしめたい。

なにはともあれ、理学部では多くの優れた先生、友人、学生に恵まれたうえ、好きな研究ができて幸せであった。事務局の方々にも大変お世話になった。東大理学部が常に「新しく、よい」発見の垣塙であることを祈りながら、お別れします。

皆様、ほんとうにありがとうございました。

水野丈夫先生の御退官によせて

竹内重夫（動物学教室）

世の中では、自然科学は、論理実証的に研究をすすめて客観性を重んじるので、あまり個人の人柄などが出にくいと言われることがある。これが謬見であることは十分承知してはいるものの、今回水野教授の御人柄を紹介するため、先生の環境、履歴、信条などを再見してみて、あらためて科学がいかに人間を反映するものかとの感を深めるばかりである。

水野教授は昭和2年、長野県で、クリスチャンの御家庭に生を享けられ、昭和初頭という風雪ただならぬ時代、横浜で成長され、昭和19年には海軍兵学校に入学、昭和20年終戦を迎えられた。第一高等学校を経て昭和22～25年、学生として、またその後大学院生として東京大学理学部動物学教室に在籍された。つまり、先生は、御自身が望むと望まざるに拘らず、“修身”ということが教育の最も重要なテーゼであった時代の風潮にたっぶり浸って青春前期を過ごされたことになる。先生の質実剛健、規則正しく、殊の外責を重んずる御人柄も、「自然に学べ」ということをモットーに、丹念に重層的に実験的事実を積み上げ、空理空論を極端に嫌われ、慎重に研究を進められる学風も、ある部分この“修身”と無関係ではあるまいと想像されるのである。硬式テニスを趣味となさり、フランスチーズとともにワインやウイスキーを飲まれるものの、間違ってもカラオケバーで飲み痴れるといったことのないのはカトリック的倫理感に基づいた精神の強さによるものであろう。殺すなかれという信仰と兵学校にあったことの精神的な葛藤については一切黙して語られないが、その後、先生が生命の学をもって一生の仕事とされたことと何分かの関係があらうかと推察するものである。

先生の動物学への傾斜は、本広報で先生みずから語られているように、オーガナイザーに関する藤井隆名誉教授の講義に魅了されたことから始まったとされている。オーガナイザーというのは、両生類の胚で、調和のとれた多細胞個体を形成する中心となる部分のことで、この機能を明らかにすることは、個体形成の機構を理解するためには欠かせない。当時、世界の発生学者が熱狂的にその研究に携わっていた。なかでも、未だ運命の定まらない細胞に働きかけ、神経細胞への分化を誘導する物質の究明に努力が集中され、当動物学教室でも故岡田要名誉教授以下かなりの研究者がこの問題に取り組んでいた。先生も昭和25年、大学院生として藤井教授の門に入り、オーガナイザーの問題を手掛けられ、これが機縁となり、今に至るまで誘導を主なテーマとして取組まれることになったのである。オーガナイザーあるいは誘導の研究は、しかし、両生類胚での解析に限界のあることが分り、次第に解析のための新しい系の開発へと重心を移していった。この間、藤井教授が細胞分裂の機構や、調和を欠いた多細胞システム、すなわち癌の生物学をテーマとして取上げられたこともあって、昭和28年、大学院を中退して助手になられた先生もこれに携わるようになった。癌の研究といってもその当時は、かなりな数のマウスやラットを何群かに分け、各種の発癌物質を濃度別に投与、飼育し、至極退屈な手続きにより標本を作製し、微細な病変を組織学的に調べるというわけで、長期に亙る辛抱強い努力が要求され、多くの院生は音を上げたものであるが、頑固と感じられる程に規律と責任を重んぜられる先生は極く当り前の顔をして研究をこなしおられた。昭和33年からは義宮（現常陸宮）正仁親王殿下が研究

生として藤井門下に加われ、水野先生は御研究の相談役として誠に折目正しく御世話されていた。

先生が誘導の仕事にもどられたのは、学園紛争が下火になった昭和44年から45年にかけて留学された、ヴォルフ教授の率いるコレージュ・ド・フランス実験発生学研究所においてである。この時は羽毛や水晶体の異型誘導を扱い、帰国後の研究の構想を創りあげられた。帰国2年ほど後の昭和47年、教授として動物学第二講座を宰領され、以来ニワトリ胚の消化器官形成時における誘導や細胞分化の機構を実験発生学あるいは分子生物学的な手段により研究され、多大の成果を挙げられてきた。この他、英国ストレンジウエイズ研究所のラスニツキ博士との共同研究により、ネズミの前立腺の発生時における上皮間充織相互作用（誘導）と性ホルモンの相関を明らかにするなど

幅広く器官形成機構を扱われ、器官形成は細胞の運命を決める誘導と、決まった運命を発見させる誘導の二種の誘導によりおきることを明らかにされた。この間、学外にあっては日本発生生物学会幹事、日仏生物学会会長、日本器官形成研究会会長、省庁・財団等の委員などを勤められ、学内にあっては理学部附属臨海実験所の所長を兼務されるなど、研究・教育以外にも数多くの仕事を極めて誠実に果たされた。

学問の進歩は個人一代の努力で為されるものではない。先生が手掛けられた研究も、日本各地で幾多の門下生に引継がれ、進められている。こうして、地味ではあるものの、個体発生の理解のために欠くことのできない器官形成を取扱う学問が、ようやく日本でも根付こうとしている。これも先生の人柄に発するものであろうか。

ご 挨拶

上 田 一 夫 （動物学教室）

昭和23年に理学部動物学科に入学してからの40年間、主として理2号館を研究の場としてきました。この間、動物学教室および理学部の多くの方方からご指導とご支援をいただきましたこと心からお礼申し上げます。それにひきかえ、教室・理学部には殆んどお役に立つようなことをしておりません。誠に心苦しく思っております。こゝにお詫び申し上げる次第です。

動物学第三講座を担当してから丸15年になりますが、すぐれたスタッフと学生に恵まれ、動物行動学の分野で一仕事できた とに満足しております。私の如き非才のものがこれまでやってこられたのは彼等のお蔭です。

私どもでは、講座のプロジェクト研究の一つとして、年間45日前後の野外研究を行ってきました。

行先は中禅寺湖菖蒲ヶ浜（日光）と三陸沿岸（岩手県）の2箇所です。後部座席を取り外した乗用車2台に計測器類を満載して出掛けます。ちょうどミニ研究室の移動といったところですが。今まで全くの無事故であったことを喜んでいます。ところで、現地の研究環境は良好とはいえません。たとえば、日光ではバンガローを借りての合宿です。厳しい寒さの中で夜半まで実験を行ったあと、食事を自分で作らねばなりません。このような悪条件下での野外研究に全員が積極的に参加し、貴重なデータを着実に積み上げてくれました。本当にご苦労でした。感謝の気持ちで一杯です。

おわりに、理学部の皆様のご健康とご発展をお祈りし、定年退職のご挨拶といたします。

上田先生の御退官によせて

佐藤真彦（動物学教室）

上田一夫先生は、本年3月に停年退官されることになりました。

先生は、昭和26年東京大学理学部動物学科を御卒業後、大学院に進まれ、本学部助手、講師、助教授を経て、昭和48年動物学第三講座担当教授に昇任され、現在に至っておられます。また、現在は、筑波大学教授（併任）、日本動物学会評議員、日本動物生理学会運営委員会、日本味と匂いのシンポジウム世話人、ニューロエソロジー談話会世話人代表として御活躍されております。

先生は、サケの母川回帰行動の機構の解析に、初めて、神経生理学的手法を取り入れた独創的研究を行われたことで世界的に高名です。以後、魚類嗅覚神経系の研究、さらに近年では、下等脊椎動物を材料とした本能行動の神経的機構の解析を指導されて、本邦でのニューロエソロジーの発展に主導的役割を果たされ、新興のこの分野の進展に大きく貢献されております。

このように、動物行動の解析にいち早く生理学的手法を取り入れて、斬新なアイデアで御研究を進められたのも、その背景として、御研究生活

の初期からの、様々な材料を用いた広範な生理学的研究に裏付けられた、豊富な経験と博識によるものと推察しております。なかでも、ツリガネムシ stalk muscle の収縮特性の厳密な測定と解析、魚類色素胞研究における split fin preparation の開発と応用、Opalina 膜電気的特性の細胞内記録法による解析、甲状腺機能の電気生理学的解析、ホルモンの中枢神経機能に及ぼす影響等の、独創的先駆的な多くの研究を残されておられます。

私が、先生の御指導を賜ったのは、生物学科動物学コースの学生として、先生の比較生理学の講義を聴講して以来です。実に22年が経過したことになります。先生の御指導法は、学生の自主性を重んじ、温かい目で見守りながら適切な示唆を与えるという、包容力のあるものであったと感じております。

先生は、本学を御退官後は、共立女子大学にて教育・研究に御専念されると伺っております。先生が御健康に注意されて、今後ますます御活躍されることをお祈り申し上げます。

自省の弁

埴原和郎（人類学教室）

学部、大学院の在学期間を加えると、私は23年余にわたって東大理学部のお世話になりました。いま、やっと東大を卒業できるというのが実感です。

私が人類学の研究をしたと思ったのは中学2年生の時、つまり14歳の少年の時代でした。こういって、ずいぶんませた子供だったように思われ

るかも知れませんが、自分が人間であるからには、自分自身を知りたいという単純な動機だったに過ぎません。

しかし結果として少年時代の夢がかない、今までなんとか人類学の研究者として過ごせたことは、まことに幸福であったと言わねばなりません。いうまでもなく、これは教えを受けた多くの先生方

や、先輩、同僚、後輩の方々のお蔭ですが、そのご好意に十分報いることもなく、東大の定年を迎えてしまったことを自ら恥入る次第です。

私は札幌医科大学と東大理学部勤務しましたが、その間、大学の教授とはどうあるべきかということ、私なりに考えてきました。そして大学教授は、次の四つのランクに分けられるという結論に達しました。

第1級教授：国際的に最先端の研究を自ら進めると同時に、優秀な後継者を育てる人。

第2級教授：研究は人並だが、指導能力の高い人。

第3級教授：研究は第1級であっても、指導の下手な人。

第4級教授：研究も指導能力も標準以下の人。

以上のランク付けに対して異論もあるでしょう。とくに問題となるのは第2、3級の順位かと思われます。

大学の教官にとって研究が重要であることは言うまでもありません。しかし教官はこのほかに、学生や後継者を指導・育成するという義務を負っています。従って指導能力の低い人は、優秀な研究者であっても、大学の教授として必ずしも適格とは言えません。これは、例えば優秀な演奏家が、必ずしも優秀な演奏の指導者とは限らないのと同じです。第2級はこのような意味で、相当高く評価できるのではないのでしょうか。

第3級も研究者として貴重な存在ではありますが、大学教官適格者とは言い難く、むしろ研究所向きの人と言うべきでしょう。

第4級はお話にもならず、大学からの追放適格者です。けれども現実には、第4級の教授が意外に多いらしいのです。

数年前、私の知人で衆議院の文教委員を勤めている議員が、話を聞きたいと言って来ました。その時は個人的に大学に関する話をしたのですが、彼の話によると、文教委員会で全国の大学教授の研究実績を抽出調査した結果、1/3余りの教授が過去10年間に1篇の論文も発表していないというのです。彼が「先生、こんな事実があるということ信じられますか」と言うので、私は「信じ難いことですね」と答えましたが、実は私自身、そのような教授を数人知っています。

もちろん、論文の数は専門によって違うでしょうし、数だけで批判することも出来ません。しかし、地方新聞の小さなコラムに寄せた随筆まで「論文」として堂々と論文リストにのせる例が多いことも事実です。また、自分では何もしないのに、教授であるが故に共著者として名を連ねていることも少なくありません。

この点で、わが理学部は神経質にも見えるほど純粹であり、この理学部に属したことを私は誇りに思います。しかし冷静に反省すると、私はどうやら第4級教授で、定年といえば格好は良いのですが、実状は追放といったところかと苦笑しているところ です。

何はともあれ、私の少年時代からの夢を実現させて頂き、そのうえ、本当は追放すべきだったかも知れない私を長年にわたってお世話下さった理学部の皆様に、心からお礼を申し上げます。今後も命ある限り、この理学部の伝統を忘れないよう心掛けるつもりです。本当に有難うございました。

埴原和郎先生を送る

尾本恵市（人類学教室）

埴原先生が人類学第一講座を担当されるため東大に着任されたのは、15年前の昭和47年の夏であった。それはついこの間のことのように感じられ、今さらながら月日の経過の早いことを思いしらされる。先生はご出身は山梨県であるが、東京の成蹊高校から東大理学部人類学科へ入学され、昭和26年に卒業されている。昭和31年に東大の大学院博士課程をおえられるとただちに札幌医科大学の法医学教室に講師として迎えられ、33年には助教教授となられた。結局札幌にも15年おられたことになる。

先生のご専門は自然人類学、とくに歯の形態学および多変量解析法による集団の近縁性の研究である。ともすれば単なる記載と個別的比較におわりがちだったわが国の形態人類学に数値解析という新しい活力をあたえられた先生の功績は大きい。大学院時代、ちょうど朝鮮戦争の頃であったが、たまたまアルバイトで米軍戦死者の遺骨の個体識別に大変苦労されたことがのちの先生のご研究の方向を決定づけたようである。このことは先生の初めての著書である「骨を読む」（中央公論社、1965年）にいっきと描かれている。ちなみに、この本は多感なひとりの青年学徒が、バラバラになった無数の人骨を個体に復元するため悪戦苦闘するなかで、自己の学問への道を探っていくという感動的な記録で、おせじぬきで名著といえるものである。先生の学位論文のテーマ「判別函数による人骨の性差の推定」は、この経験から生まれたものである。札幌へ行かれてから、米国やオーストラリアへのご留学をふまえて、先生は歯牙人類学、つまり歯の形態の人種差や進化の研究に打ち込まれ、この分野の第一人者となられた。

昭和41年より3年間、国際生物学事業（IBP）

による特定研究に参加する機会があり、私は毎年北海道でのフィールド・ワークで埴原先生とお会いできるのを楽しみにしていた。研究対象こそ骨や歯といった硬い組織であるが、日常生活では先生はなかなかの“軟派”で、私ども若手は先生に人類学の話をお聞きするのにかこつけて、なにかというところ“すすき野”へ連れて行っていただいた。また、先生は大変な愛犬家で、当時はビーグル犬をなん匹も飼っておられた。たまたま私がネコずきだったため、ある晩飲みながら、先生とおおまじめでイヌだネコだと大議論になり、周囲の人をあきれさせたこともあった。無論、このようなことは例外で、おおかたの話題は人類学のこと、とくに日本人形成論についてであり、この頃先生と話合った経験はのちの私の学問的発展にとっても大いに有益であった。

東大に戻ってこられてから、先生はいち早くコンピューターによる数値解析を人類学に取り入れられた。それまで眠っていた全国の人骨標本の計測資料について多変量統計解析法により様々な時代、地域の集団の比較を行い、日本人の形成に関する多数の著作をものされた。従来、日本人の形成に関しては、大陸からのヒトの移住をどの程度と考えるかにより、「混血説」と「時代変化説」とが両極にあったが、これらは主に直観的でナイーブなものであり、数値的な分析にもとづくものではなかった。埴原先生は、この問題にはじめて数値分類の手法を適用され、混血説の立場を明らかにされている。

人類学教室の主任のほか、昭和58年には総合研究資料館館長に、また昭和59年より日本学術会議会員となられ、先生はますます多忙となられた。私共の心配は先生のご健康であった。高血圧のほ

か痛風になられたこともある。また、数年前、先生は白内障のため両眼の手術をうけられた。私共が心配したのは、手術後まもない時にも先生は、夜おそくまで愛用のパソコンの前に座られてご研究に余念がないことであった。幸い、全快されたからよかったが、あのようなことを医者が許すはずがなく、先生の研究熱心さには敬服させられる。昭和62年度より、京都の国際日本文化研究センタ

一の教授に任ぜられ、東大の方は併任となられたので、数日おきに京都と東京を往復される日程が現在つづいている。先生はこの新設のセンターに大きな期待をもたれ、お見掛けするところでは超多忙のなかにも実に充実した毎日のようである。先生にとっては忙しいほうが健康によいのかも知れない。今後共、先生の益々のご活躍を期待している。

黒沢幸子博士の御退官

岩 槻 邦 男 (附属植物園)

植物学教室助手の黒沢幸子博士は今年度一杯で定年となり、退官される。

黒沢さんは帝国女子理学専門学校を昭和22年に卒業され、同校に出講しておられた巨理先生の御紹介で、原寛助教授(当時)の研究室に勤務され、原先生が積極的に推進しておられたバイオシステムティックスの一翼を担い、細胞分類学の研究を始められた。1960年に日本の植物についての研究成果を発表されて以来、17篇の原著論文を公表された。特に、原先生を中心に、東京大学の研究グループがめざましい成果をあげてきたヒマラヤ植物の研究では、フィールドの調査にも参加され、細胞分類学の分野で大きな貢献をされた。

筆者の個人的な関わりを書かせていただくのは恐縮であるが、まだ大学院生の頃に東大の資料標本の研究をさせていただくために原研究室へお伺いした際にお世話になった頃から数えれば、もう30年以上おつき合いを願っていることになる。ヒマラヤ植物の研究では、最初から研究グループに加わるようお招きいただき、1972年には現地調査のメンバーにも加えていただいたので、その一環としていろいろ御面倒をお掛けすることになった。そして、1981年に東大に移ってからは、厳密に言えば、植物学教室と植物園と所属は異っていたものの、教室の先生方の御理解もあって、毎週の植

物園研究部セミナーには御出席いただいたし、1984年には、学術振興会の国際共同研究のメンバーとして、中国雲南省の調査に御協力いただくことができた。

研究の周辺でも、黒沢さんが寄与されたことは多い。1966年に東京で太平洋学術会議が開催された時には、植物学部門の責任者だった原先生をよく補佐され、とくにその際企画されたバイオシステムティックス国際シンポジウムでは裏方として働られ、参加者に喜んでいただける舞台作りにも盡力されたことは関係者にはよく知られている。ヒマラヤの調査では、ブータンやシッキムなどでは王室を含め各階層の人との親交が深く、国際人としての Dr Kurosawa はここでも著名である。

黒沢さんが研究されたのは高等植物一般であるが、その中でも、身近にありながら基礎的な研究がまだまだ不完全なアオキやアカネなどや、葉の表面に花がつく姿が人目を惹くハナイカダなどで、貴重な業績を上げられた。黒沢さんの学位論文も、一緒に研究をされた原教授の東大へ提出されたのではなく、外部の東北大学へ提出され、客観的な評価を受けられたものであった。

教務技官でおられた間には、植物学教室の教務関係の事務一切を処理されていた。筆者も、授業の担当、大学院生関係の事務一切、またカリキュ

ラム委員会と、その面でもいろいろお世話になってしまった。

黒沢さんが今年の3月で退官されると聞いて信じられないという顔をする人が多い。お見かけするだけではとてもその年齢に達しておられるとは思えないからである。その若さで、御退官後も好きな研究を続けたいという希望をお持ちのように伺っている。身につけられたテクニックを駆使して、良いお仕事を続けられるよう期待している。とりわけ、ヒマラヤ産の植物などについては、生植物の貴重な系統を植物園に移していただいております。御自身の研究に活用していただくだけでなく、利用したいと願っている内外の研究者の希望に沿

えるように、情報などを整備していただくこともお願いしたいと考えている。

御退官を控えて、ずっと御一緒に暮らしておられた御母堂だけでなく、長年そのお世話をされて家族同様につき合っておられた方もお亡くなりになる悲しい出来事が続いたようであるが、御退官を機に心機一転して、親しい植物と共に歩む日々を健康でお過しいただくよう念じたい。41年に及ぶ植物学教室でのお仕事について、お世話になった数多くの関係者の1人として心からお礼を申し上げるために、御退官という一つの区切りになるこの機会を利用していただきたい。

化学教室の38年

増 田 昭 三 (分光化学センター)

理学部広報3月号は、毎年還暦をお迎になられた諸先生方、並びに、同諸先生方をお送りする先生方の記念すべき御言葉が特集号として生まれ、その内容を拝読させて載せ、その都度深い感銘を覚えて参りました。遂に私にもその番が廻って参りました。永い理学部の勤務の中で、日頃御指導戴きました諸先生方、またいろいろな形で御世話になりました職員の皆様、理学部を去るに当たり、本号の場を借りて御礼申し上げると共に、幾つかの思い出を書き綴り退職の言葉と致します。

昭和25年11月1日に理学部化学教室の職員として私は採用されました。私の身内の者で当時、島村修教授の下で助手(現在名古屋大学名誉教授)を致して居りました者の紹介により、漆原義之教授の面接を受け、一般職員として採用されましたが、当時は未だ東京理科大学の学生でした。指定された当日、化学教室へ登学し、漆原教授室をお尋ね致しましたところ、先生は「これから化学教室の各講座の教授・助教授の先生方に御引合せしますから」と申され、超一流の化学の諸先生方に

次々と各教授室を廻って御紹介下さいました。この諸先生方への紹介は、終生忘れる事の出来ない感激的な私にとっての出来事でした。当時、大学で使って居りました教科書、参考書の著者であられる大先生に、短時間に一度にお目にかかることが出来たものですから、当人にとっての感激、昂奮は想像を遥かに越えるものでありました。諸先生方の御名前は、鮫島実三郎先生、左右田徳郎先生、木村健二郎先生、水島三一郎先生、南英一先生、森野米三先生、赤松秀雄先生、島村修先生、斎藤信房先生、島内武彦先生の各先生でございました。此の時以来、将来化学教室で研究を許可される様な身分に成ることが出来た時には、これら諸先生方の御業績の千分の一でもよろしいから、立派な仕事と云われるものを残してみたいと云う一種の願望の核の様なもの、私の中に小さな結晶として析出し、これが時代の経過と共に徐々に成長し、熟成して行きました。

化学教室の当初の仕事は、島村先生の試験管洗いから始まりましたが、昼の勤めと、夜学の学生

生活を両立させたため、この生活の急変に追いつけず、遂に療養を余儀なくされてしまいました。漆原先生、島村先生、其の他有機化学の諸先生方の御理解と御励ましにより、教室に復帰できたのは、約1年後の事でした。復職後の私を待って居りました第一の仕事は、有機元素分析室の建設でありました。分析室、分析装置、微量天秤等はすべて用意されて居りましたが、その他は全くゼロからの出発でした。分析技術は稲本教授（当時大学院学生）の御指導を仰ぎ、懇切、丁寧な特訓が毎日続き、やがて稲本先生の御熱心な適確な御指導の御蔭で腕も上り、どうやら有機元素分析の業務を軌道に乗せるのに成功致しました。後年、島村先生の下で、稲本先生の御指導を仰ぎながら天然物有機化学の勉強が出来ましたのも、また、現在迄も続いて居ります稲本先生の御指導による有機化学の理論の一分野の開拓も、実に此の元素分析の御指導を戴いた事がその切っ掛けになった訳です。

ルーチンに行って居ります元素分析と云ういわば研究の裏方の仕事は、単純な操作の繰返しの様に見えますが、今になって振り返ってみますと、高い精度の分析結果を提出する技術を絶えず持ち続けると云ういわば強制力の場に身を置かせて戴いた御蔭で、後年、研究に参加させて戴いた折の、研究に欠く事の出来ない解析的な資質乃至は能力と云ったものとか、学問上の興味と執念を絶えず持ち続けると云った能力が徐々に培われて行った様に思われ、此の分析のお仕事をお与え下さった漆原・島村両先生に心から感謝致して居ります。

或る知人の書き物の中から、こんな事を教えられた事があります。専門の研究に限らず、問題の背景に潜む真随を読もうとする——読めてくる——読めると云うことは、個人にとって大変重要な資質であり、この段階を繰返し積重ねて行くことが、本とか、物事、研究の読み上手になる秘訣ではなからうか、と云うものです。この事は自分自身の中で、知識の構造化とも云うべき精神作業が徐々に熟成されて来ると云うことを意味しているの

はないかと思われまます。稲本先生が学生を御指導になられる理念の一つに「定説に疑問を持って」と云う御言葉がございます。問題とか現象の本質を読もうとする——読めてくる——読めると云う繰返しにより得られる知識の構造化によって、定説が果して本当に正しいか否かが読める様になるものと私なりに解釈し、先生の御指導の下に先程のテーマの研究をさせて戴いて参りました。

分光化学センターに移りましてからは、歴代のセンター長の御指導に與り、特に黒田教授、朽津教授にはセンター長の他に、化学教室主任として、また理学部長としてお世話になり、また化学教室の諸先生方にも一方ならぬ御世話になりまして無事今日まで勤めさせて戴きました。衷心より御礼申し上げます。分光化学センター助教授の内藤先生には、同室で種々御指導に與り、大変御世話になりました。また学部四年生の物理化学実験では、物理化学系の諸先生方にも大変御世話になりました。研究の面では有機化学分野で、大木道則教授、高橋武美名誉教授、岩村教授並びに露木先生、岡崎先生、中村先生をはじめとする諸先生方には、側面から絶えず研究の成果を見守り下さり、限らない御支援を給りました事に対し、深甚なる謝意を表します。また分光化学センターの業務遂行上、御支援戴きました化学教室の田上事務主任、平尾事務室主任をはじめとする皆様、理学部事務室の皆様にも心から御礼申し上げます。また学生実験で御世話になりました杉浦技官にも感謝申し上げます。最後に、化学教室の元素分析室を引継がれ、東京大学乃至は東日本随一の立派な元素分析室に築き上げて下さった関俊子、佐伯喜美代両技官に対し、又これを御支援下さり、漆原、島村両先生の開かれた分析室を立派に御育て下さいました化学教室の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

永い間、大変御世話に成り有難度うございました。

増田昭三さんへの送別の辞

内 藤 周 式 (分光化学センター)

増田昭三さんは昭和27年東京理科大学理学部化学科を卒業されましたが、東京大学理学部化学教室には昭和25年から技官として在職され、28年間有機分析室で元素分析の業務に従事されました。その後昭和53年理学部附属分光化学センターが設立されると同時にセンターの方に移られ現在に至っております。その間、昭和62年には助手に昇任されました。

このように40年近くの長きに渡って化学教室とその周辺におられた増田さんにとって、今年度で東大を去られることは、真に棲み慣れた土地を去るような……そんな事にあたるのではないのでしょうか。その誠実温厚なお人柄は増田さんに接した誰もが感じることであり、元素分析や分光化学センターの装置のことでお世話になった方々もずいぶんと多いと思います。さらにここ10年位は化学科の4年生の物理化学実験のお世話もなさってこられ、その懇切丁寧な対応に感激した学生諸君も多かったのではないかと思います。このように増田さんは技官として非常に有能な方であり、その定年退職は分光化学センターとしても化学教室としても非常に残念なことです。

増田さんは技官としての業務を続けられる傍ら、有機化学に関する御自身の研究テーマを持ってこつこつと研究を続けてこられました。最初のうち

はその業務環境を生かした元素分析の研究や、天然有機化合物「苦木の成分」の研究を続けておりましたが、やがて机上ででもできる「有機化合物の置換基効果に関する経験則」を確立しようという意欲的な仕事に取り組みられました。主に核磁気共鳴法における炭素13の化学シフトの置換基効果に着目し、置換基原子の物理量（有効核荷電、有効主量子数）に基づき新しい誘起置換基数を提出され、経験的ハメット則（直線の自由エネルギー関係則）の中に電気陰性度に基づき概念を新たに導入されました。この業績により昭和55年には東京大学より理学博士の学位を得られ、長年の努力を結実されております。

増田さんのことでもう一つ特筆すべきことは、書道に堪能でいらっしゃることです。化学教室や分光化学センターで催し物があると看板等の毛筆は増田さんをお願いしようというのが常識でしたが4月からはどうなるのか心もとないところです。余暇には音楽会を楽しまれたり、昔は油絵をたしなまれたこともある由、これからはもう少しそんな時間も増せるのではないかと思います。「置換基効果」の研究の方も今が佳境だそうで今後も続けられるようですが、健康にくれぐれも留意され、多方面での増々の御活躍を心からお祈り申し上げます。

理学部附属植物園について

水野昌平（植物園）

理学部附属植物園に勤務するようになって3年有半、この3月を以って定年を迎えるに当りまして、植物園について皆様のご理解を一層深めていただければとの願いを込めて一言申し述べたいと思います。

植物園は名称のとおり、東京大学理学部の附属植物園で、植物学の教育・研究に加え、野生植物の系統保存、遺伝子資源保存などを行っている研究植物園である。一般には「小石川植物園」、分園は「日光分園」と呼ばれており、公開展示を主目的とする植物園と感違いをしている人が来園する一般市民のほとんどであり、東大職員の中にも公園の設備と思っている人が少なからずいる（かつては私もその一人であった）。ご承知のように一般に公開されているが、その目的は折角収集されている多様な植物に接し、親しんでもらうことにより植物、ひいては自然に関心を持っていただくことにある。

植物園とは、一般に人為的に造られた園芸植物が一ぱい植っていて美しい花が咲いており、雑草などはなく、順路は掃き清められ、各々の植物にはラベルが付いていて簡単な説明までしてある。温室はアルミの柱が目に見え鮮やかで硝子はよく磨かれており、池の護岸、柵、ベンチなども手入れが行きとどいていると思っている人が多い。そういった人々は、我が植物園に入園して認識と現実との違いに驚くことになる。公開している以上、それなりに整備が必要なことはいうまでもないが、この植物園は教育・研究用や遺伝子資源として系統保存する植物が主体であるため、見た目には美しい花や草木は少ない。また、不本意ながら本園・分園共に、植物ラベルはまばらであり、池の護岸は所々くずれており、温室の一部と日光分園の便所

（未だに貯便式）の一部は老朽のため修理不能であり、柵も所々倒れており、ベンチも古ぼけて見苦しい。およそ手入れが行きとどいていないとはいえない。

これらの主な原因は、理学部、庶務部・経理部の関係の方々のご援助・ご努力にもかかわらず、(1)予算が不十分であること。(2)植物の育成・管理を行う職員数が従来の約半数に減っているため、本園の主目的である教育・研究費用などの植物育成・管理で手一ぱいであり、公開部分の手入れが滞っていること。(3)入園者のごく一部の人（ちん入者と思われる）のイタズラがあとを絶たないことである。

植物園としても最近では、職員全員が月に1回、園内一斉清掃を行うなど公開部分の美化などの点でも、鋭意奮闘しており、職員一人ひとりが自分の住居の美化を心がけるような自覚を一層深めて、さらに努力を重ねているが、植物園も良くなったと皆様からお誉めをいただけるようになるのは、何年後のことであろうか。

どうか皆様のご理解とご声援をお願い申し上げます。

私は、昭和25年、経理部にまいり、その後、施設部、経理部、工学部附属原子力工学研究施設、物性研究所、そうして植物園と、38年の永い間お世話になりました。

わがままな私が無事、定年を迎えることができますのは、経理部以来の、ならびに理学部、植物園の諸先生、先輩、同僚の方々のご指導・ご支援をいただいたお蔭です。

この紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。最期に、皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。

水野事務主任の定年にむけて

平原茂子・渡辺隆之(植物園)

植物園本館改修後の真新しい机や椅子の納入と同時に着任されたのが水野事務主任でありました。着任早々の昭和59年10月15日には、『植物園300年記念と本館改修の完成披露』が行われ、その式典の為の準備は前主任がなされ、詰めの段階と当日を新主任に引継いで行うことになった行事でした。植物園は過去に『植物園一般公開90周年記念』の行事があって以来23年振りのことであり、さらに本館改修完成披露も加えた形での行事を着任早々成しえて、植物園事務主任としてのスタートをして今日までこられたわけであります。

過去の事務主任の内、この時の事務主任ほど短期間に多くの行事に当たられた事務主任はなかったと思います。

昭和59年10月に行なわれた植物園300年記念及び本館改修披露をはじめ、昭和60年9月のムニンノボタン引渡式、昭和60年11月の第一回国際生物学賞記念シンポジウム、昭和62年2月のニュートンのリンゴの木贈呈式など、植物園外での対応を迫られる事業が相次ぎ、いずれも準備段階に当たって種々用意するものから、関連する方への通知文書のリストアップを受けて発送や回収作業のまとめや当日の来客への気くばり、進行に当たっての配慮など一般職員とは違った意味での気苦労が事務主任には多かったのではと思い出されます。

しかしながら、昭和25年東京大学に入職以来、事務局会計課より出発して、施設部、経理部、工学部附属原子力工学研究施設、物性研究所と歴任され、その豊富なご経験から、植物園での行事も滞りなく終了した。それは、昭和59年10月1日～昭和63年3月31日の3年6ヶ月という短い期間でしたが、植物園を象徴する様な行事が目白押しする中で過ごされたといっても過言ではない様な気

がする。

また、植物園における特殊事情、すなわち大学事務の他に公開業務があり、近隣の住民との接触が必要ということがある。

例えば、秋になると周辺住民からの落葉の苦情があり、それを受けるだけでも心労が多いと推察されますが、その場へ出向いて住民の方からの話しを伺い状況を見られたりして、住民側と植物園との接点を見出して大学側へその要望書をお持ちになり努力されていた主任の姿が印象的でした。この約16万㎡もある面積の塀際周辺の樹木を整備することは、植物園内の植生配置に関する整備にも関連するものでもあり、落葉の件ばかりでなく、植物園にある特殊事情を考えますと大変なご苦労だったと思われます。その後、大学側への要望が響き整備が開始となったことは、主任の努力が報われたこととして特筆すべきことと思いました。

さらに、前理学部長の示唆によって始められた入園者からの意見の導入の件も『ご意見箱』と称して、植物園正門に箱をおかれ、一般の方が書かれた意見にも熱心に目を通されるなどして、多数の意見をもとに改善策を考え、先生方や技官の方との意見を合わせて、公開植物園としての任務がある以上、大学事務はもちろん、一般の方との協調が必要不可欠であるという意見を秘めながら行動する主任にとって、業務が十分果たせる様に対応したらよいかを心配されている姿もありました。

最後に水野事務主任にとって、自らの最大の行事、定年退職を迎えることになったわけですが、私達が水野事務主任といっしょに仕事をさせていただいた約3年あまりの間に、上司として、人生の先輩として、多くのことを教えていただき、本

当にありがとうございました。そして、退職後は歴史の好きな主任らしく故郷名古屋の歴史散歩を計画しているご様子で、愛妻弁当をおいしそうに召し上がりながら熱く語られる主任に長いお勤め

お疲れ様でしたと申し上げる次第です。そして、第二の人生を末永くどうぞ健康で過ごされますようにと祈るばかりです。

退職に際して一言

堀 弘 一 (事務部教務掛)

この1年、「教務関係行事予定」にのって走り続けているうちに行事もほとんど終りに近づき、卒業式を残すのみで余すところ1ヶ月となりました。4月1日からも教官と学生さんたちと接触する色々の仕事が待ちかまえていて——という楽しみがなくなりました。現在のところ退職してゆくという実感がありません。理学部での11年余り、あわただしい明け暮れに終始したように思われま

す。
去る昭和35年に地震研究所に勤めさせて頂いたのが東大職員の始まり。その年2月に生まれた次女が28歳になりました。本当に歳月の流れの速さ

を改めて感じております。地震研究所、工学部、薬学部、農学部と在職し、期間の長さ短かさはありましたが、それぞれの職場で大変お世話になりましたが、それぞれの職場で大変お世話になりました。思い出も尽きません。特に最後の勤め先となった理学部では、先生方、職員の皆様に公私にわたり親しく接して頂きました。長く職に留まっていたので、さまざまな経験をし、自分なりにきめ細かく対応することを得たように感じております。

ともあれ、お蔭様で大過なく勤めを終え退官いたしますことが出来て厚く御礼申し上げます。

理学部の益々の御発展と諸先生、職員の皆様の御健康を祈念して退職の御挨拶といたします。

堀 弘一さんの退職によせて

田 中 満 嘉 (中央事務)

堀 引一さんは、昭和63年3月末日をもって定年退職されることになりました。毎年退職される人達の噂を耳にするたびにひとしお寂しい気がしてなりません。堀さんもその一人となってしまいました。

昭和35年地震研究所に奉職されてから、昭和39年に工学部、昭和41年には薬学部、昭和48年に農学部、昭和52年に理学部とそれぞれの数多くの職場で活躍され、思い出も多く、感無量なるものがあるかと思われま

す。
10年を上回り在職していました。私は、昭和60年4月理学部に移り堀さんとの仕事の出会でした。僅か3年間の職場での付き合いでありましたが、堀さんは、教務関係の仕事の長い間担当して来られ、多岐にわたる仕事を消化し、また、掛の人達に対しても、よき先輩としてよく指導され、その責務を果されて来ました。また掛の人達からも親父として親しまれていたようです。この間幾多の困難な問題にも遭遇され、辛い思いをされたことも数多くあったことと思いますが、これらをよく克服されたと思います。

堀さんは、また若い頃からかなりの酒豪と噂されていましたが、ここ2～3年本人からは酒が弱くなった（酔いが早くなったことでもあります。）といいますがまだまだかなり呑むようです。最近では時々医者に行く日もありますが体を大切に

お酒は適当に！

最後に堀 弘一さんの今後の御健康と御多幸をお祈りするとともに大変お世話になりましたことに対して、御礼申し上げます。

ガラスとの出会い

平野 光 康（物理学教室）

“光陰矢の如し”の諺通り、過ぎ去った年月は、本当に短いものでした。

昭和23年、二食での主食が、ジャガイモの代用食であった頃、縁あって物理教室のガラス工室に就職することができました。

ガラス板、ガラス瓶、ガラス食器しか見たことのなかった私でしたが、ガラス管がガスの炎で溶かされ、変形し、いつの間にか一つの製品に出来る過程を見ると、不思議さと同時に、驚異を感じたものでした。

当時、登山好きのKさんが、お一人で教室のガラス部門を担当していましたが、その作業を見ているうちに、挑戦への気構えが不安のある中で、生まれて来たものです。まだ昔の徒弟制度が、この世界には少し残っていた時代です。

何も助言を得られず、一本のガラス管で一日中溶かす作業を繰り返していたものです。

見様見真似で練習を重ねているうちに、ガラスを溶かす要領を会得することができ、自然に曲げ、緊ぎの工法が出来るようになって来ました。

しかし、当時の実験装置の主流は、ソーダーガラスであり、耐熱ガラスとしてはSB管か、テレックス管で、焼き過ぎると、粘性が低下し、変色し、歪が大きく、今、緊いだ所が破損し、何度も同じ作業を繰り返し、ガラス細工の難しさに音を上げる始末でした。

其の度に先輩の親切な指導と励ましで、放棄したくなる心を押え、どうにか研究者の希望に応じ

られる様になりました。

その頃、私にとって良い師であり、友であったK氏が急逝し、仕事の上で困惑を感じていたところ、幸なことに、以前教室のガラス工室に居た事のある「細工名人」と言われていたN氏が復職してこられ、定年で退職されるまで教を乞うことが出来ました。

N氏は口癖のように、「細工は一生を掛けても、これが完全だと言うものはなかなか出来ないよ」と、よく言われていた事を今でも忘れることは出来ません。

昭和40年代に入り、米国から Corning Co. のパイレックス管が輸入され、教室の実験装置の80%がこれに変わり、ソーダーガラスの弱点を補い、加工の面で技能を生かせる様になりました。

又、N氏から、仕事の上で腕力を鍛えた方がと、軟式庭球の指導を受け、学内の選手との交際から、いつの間にか文部省チームのレギュラーになり、共済組合主催の全国大会にも出場しました。そして、都の公認スポーツ指導者のライセンスも取ることが出来ました。

在職40年、戦後の混乱期から多くの先輩、友人に恵まれ、自分なりに希望を持って楽しく過すことが出来ました。

今、定年を迎えるに当たり、これ等の方々と慣れ親んだ職場に、哀愁と愛着を感じています。

構内の銀杏の四季の色どり、夕陽に映える時計台を時には思い出し、長い間、理学部に席を置け

た喜びを、噛み締めることが出来ると思います。
お世話になりました皆様にお礼申し上げますと

もに、皆様のご健康と理学部の発展を祈らせて頂
きます。

平野光康さんを送る

清水 忠 雄 (物理学教室)

物理学教室およびその周辺で行なわれてきた研究実験を、長い間しっかりと支えてきて下さった平野さんを送る時がとうとうきてしまいました。平野さんが理学部にはじめて来られたのが、昭和22年ということですので、実に40年の長きにわたり働いていただいたこととなります。この間にどれだけ多くのガラス装置を作っていたか、またその作品が、どれだけ研究のために役立ってきたことか、数えあげたらきりがありません。

夏休み前のガラス細工実習で、ガラス管の切断からはじめて、おきつぎ、簡単なガラス器具の作り方を手にとるようにして教えられた経験をおもちの人が多くでしょう。実験室で装置に事故がおこれば、いつでもとんできて修理をして下さり、また時には、素人が考える無理な設計、注文にも根気よく対応してよりよい解決を見出して下さいました。

40年の間には実験機器も大幅に進歩し、研究室の中もだいぶ様変わりしました。先端的な研究を進めるためには、高機能な、微妙な、そして高価な機器をずらりと並べることも必要になりました。しかしそれにもかかわらず、いやむしろ先駆的な実験をしようとする程、ガラス器具、装置のもつ重要性は、少しもおとろえてはいません。十分に高い真空度が保てること、清浄であること、広い温度範囲に堪えられること、それに加えて加

工性がよいことなど、ガラスのもつ優れた性質はまだまだ捨て難いものです。ただし高度の実験になるにしたがい、複雑な構造、困難な接着、高い精度などなど、ガラス加工に対する要求もますますきびしいものになってきました。ガラス装置が高い評価を受けるのも、平野さんのような優れた技術者があってこそなのです。

ガラス技術者が、研究室のすぐそばに居てくれるということが、どんなに大切なことかあらためて認識している次第です。これはただ単に装置の急な事故や、急いだ改造などに、ただちに応じられるという便利さだけではありません。研究室で行なわれていること、部屋の雰囲気、また時には研究者の個性までものみこんだ上で仕事ができるということで、このような共同作業が素晴らしい成果を生みだしてきたということなのです。平野さんの払ってこられた御努力に対して、深い敬意と感謝を表したいと思います。

平野さんは、知る人ぞ知る、理学部内でも1、2を競うテニスプレーヤーです。スポーツで鍛えられてきただけあって、とても退官されるような方とは見えない若々しさです。これからも時々理学部にプレーにおいで下さい。そしてその折には是非仕事のことでも、相談にのっていただければ幸いです。

新しいご生活のスタートをお祝い申し上げます。

竹脇潔先生を偲んで

守 隆 夫 (動物学教室)



本学名誉教授、竹脇潔先生は去る1月16日、東京都多摩老人医療センターにて逝去されました。享年82歳でした。

先生は明治38年富山市のお生まれで、東京帝国大学理学部動物学科を昭和3年に御卒業後、ただちに同学科の助手となられました。以後、講師、助教授と進まれ、昭和22年教授となり、同40年定年退官されるまで37年間本学に勤務されました。

先生の御専門は動物学とくに実験形態学・内分秘学で、我国におけるこれら学問分野の創始者として、世界的に高く評価された数々の業績をあげられました。明治・大正時代のいわゆる博物学を中心とした日本の動物学界の流れの中で、早くから哺乳類(主としてネズミ)を用いて近代的な実験動物学の道を歩まれました。なかでも「哺乳類の幼児期におけるホルモンの影響」に関する研究では、先生の研究室は世界的メッカとなり、現在も門下生達が各地でさらにそれを発展させて世界の学界をリードしています。

先生はまさに研究一途の御生活で、日曜も休日もなく、朝8時前には研究室に来られ、まずネズミの世話をされてから研究を始められ、決った時間に帰られる規則的な生活を送られていました。時々、新しく進学した大学院生が先生より早く登校したりすると、先生は翌日、普段よりさらに早

く研究室に来られるといった茶目つけもあって、私も先輩から、5分でもいいから先生より遅く来いといわれたものです。若い頃は厳しい先生であったとのことですが、包容力のあるお人柄で、門下生には変わり者の多いことでも有名でした。先生は自から寸暇を惜しんで研究に打ち込まれることで範をたれるといった教育方針で、あまり細かいことは言われなかったとのこと。ある大学院生の場合、ほとんど先生に研究の進展を話さないため、さすがの先生も心配されておられたらしく、ある日、彼の部屋の様子を見にいかれたところ、一心不乱にネズミの手術をしているところだったので何も言わず自室に戻られ、あとで助手に「仕事をしておるから、ええじゃろう」とおっしゃって、二度とその学生にデータを見せるようにとは言われなかったとのこと。

御退官まじかに先生の門下生となった私にとっては、厳しい先生といった感じはまったくなく、温顔に常に笑みをたたえて、若い我々の勝手な議論を聞いておられ、時おり適切な助言をして下さいました。何かの折、食べ物話になり甘党の先生と意見がちがったので「先生はお酒をのまれないから、酒の肴の味がおわかりにならないのです」と申し上げたら、「奈良漬なら三枚までは食べられる」とおっしゃった事は今でも強く印象に残っております。この話には説明が必要で、以前先生の同僚の教授が来られた折、お二人で「私は奈良漬一枚で酔払う」「私は三枚までなら大丈夫」といった会話があったのです。先輩の言によると、本学御退官後、東京女子大教授となられてからずいぶん変られたとのこと、我々門下生の遠足に女子大生を連れて来て下さったり、東大時代は決してなされなかったのに、女子学生の就職の際は

先生も御一緒され挨拶されたので、その学生を引き受けた門下生の一人は、「先生がわざわざこられて、頭を下げられちゃ、OKしないわけにはいかないよ」と笑っておりました。その後、川崎医科大学に移られてからは、それまで時間の無駄だとおっしゃって、あまり出席されなかった学会にも参加されるようになり、奥様とお二人で旅行を楽しまれました。

70才で川崎医大も退官されると、跡見女子大の非常勤講師を務められたほか、日本学士院会員として月一回の会合を楽しみにされていました。また月一回は教室に来られて、新着雑誌のコピーを持ちかえられて勉強されておられました。先生は英語に堪能で、門下生に限らず広く日本中の動

物学者の論文を校閲されたため、直接先生の御指導を受けなくても、弟子を自認する者が多く、我々は先生といわず大将とおよびしていました。

医学部本館前にチョウセンホソオチヨウが異常発生した時、一頭採集して差上げたところすぐ見に来られて、それからは毎年、発生時期を楽しみにしておられましたのに、昨年4月、不幸な交通事故に遇われ、一命はとりとめたものの意識が戻らず、長い闘病生活を送られていました。まだ論文の校閲、データの議論などお願いしておりましたので、この度の御逝去、誠に残念でなりません。包容力のあるお人柄と偉大なご業績を偲び、謹んでご冥福をお祈りします。

赤松秀雄先生を偲んで

黒田晴雄（化学教室）

本学名誉教授赤松秀雄先生は去る1月8日、クモ膜下出血で77歳の生涯を閉じられました。

先生は昭和10年に東京帝国大学理学部化学科を卒業すると、引き続いて大学院に進まれ、鮫島実三郎先生の研究室で研究に従事されました。当時は副手という制度があって、大学院在籍中理学部副手を勤めておられます。昭和15年に理学部助手に就任され、昭和18年に助教授、そして、昭和26年に鮫島先生の後任として理学部教授に昇任されました。以来、昭和46年に定年で本学を退官されるまで、20年間理学部教授として本学において研究・教育に尽力されました。

鮫島先生はわが国におけるコロイド化学、界面化学の研究の創始者というべき方で、鮫島研究室ではその分野の様々な研究が行なわれましたが、赤松先生が最初に手がけられたのは、互いに接する固体表面での摩擦に対する有機分子の潤滑効果に関連した研究でした。これが先生の学位論文になっています。その後、炭素材料の構造に関心を

向けられ、X線回折、電子線回折等の手法を用いていわゆる非晶質炭素の基本構造を解明する努力をされました。その一連の研究の中で、終戦直後先生は、ベンゼン環が多数縮合した多環芳香族炭化水素の数種類を濃硫酸に溶かした溶液から炭化水素を急激に折出させると、非晶質炭素に極めて類似したX線回折パターンを与える黒色の固体が得られることを見だし、それを「化学的に合成した」非晶質炭素のモデル物質と提唱されました。これは、その後の炭素材料の研究に大きな影響を与えた重要な研究ではありますが、先生は構造的な類似性から、さらに物性面での類似性に目を向けられ、教授に就任された前後から多環芳香族化合物の固体の電気伝導性の研究に着手されました。先生の発想の根底をなしていたのは、ベンゼンから多環芳香族炭化水素そしてグラファイトまでを一系列の物質とみなしうるということであつたと思います。この研究から「有機半導体」の概念を、世界に先駆けて昭和28年頃に提出されましたが、

それが契機となって、有機結晶における電子伝導現象に世界の研究者が関心を向けるようになりました。この研究によって、先生は共同研究者の井口洋夫氏（現分子科学研究所長）とともに学士院賞を昭和40年に受賞しておられます。

先生は、第6、7期日本学術会議会員、その他の役職を勤められ、わが国の学術の振興のために努力されましたが、本学の学内行政面でも大変ご尽力になりました。大学紛争当時、先生は評議員でしたが、大学を正しい方向に導くべく、理学部長をなさっていた藤井先生を助けて獅子奮迅の努力をされました。その頃教授会メンバーであった方には、当時の先生の活躍の様子が今も印象に強く残っていることと思います。

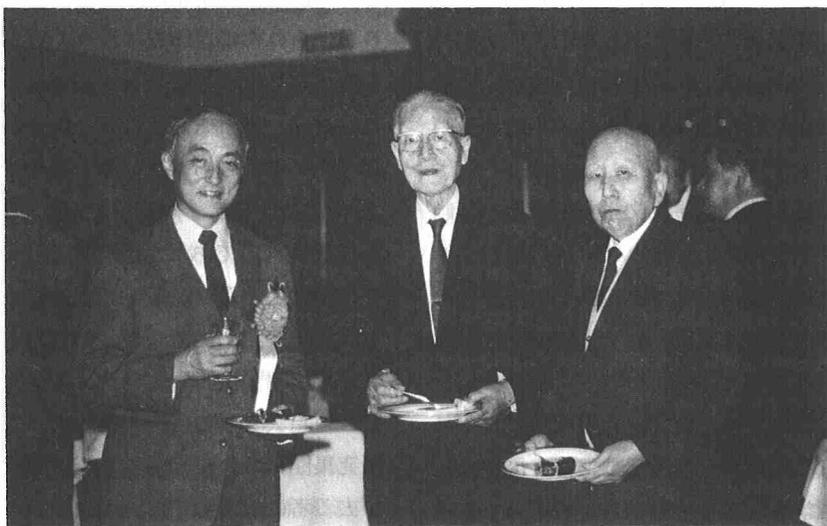
本学を定年退官されてから4年間程、横浜国立大学工学部教授を勤められ、その間に、材料基礎工学研究施設長や工学部長をされましたが、昭和50年に、分子科学研究所が創設されると、その初代の所長に就任され、昭和56年に退官されるまで6年間にわたって、分子科学研究所を発展の基礎の確立に努力されました。

先生は若い頃から「潮音」のグループの歌人として活躍しておられました。短歌に関する評論も数多く執筆しておられます。先生は昭和17年頃に

「潮音」に書かれた随想の中で「歌で科学して居ては写生写物に終わる。歌の立場は虚を尊ぶ。しかも実を離れない不断の修養がある。科学の立場は実である。しかも実に終わらない虚の心掛けが要る。虚実は一体である。」とっておられます。いま、先生が他界されてあらためて思い起こしてみると、大学の研究室においてわれわれ門下生に与えられた先生のご指導の中にも、科学者と歌人とが共存していた先生のこのようなお考えが現われていたように思われます。

先生は、ここ10年近くパーキンソン氏病を患っておられ、毎日薬を服用しておいででした。「おれは自分の体で化学の実験をしているんだ。」と、お目にかかる度に薬の服用の効果を詳しく話して下さいました。先生の健康が年とともに少しずつ衰えてゆきつつあるのを門下生達は氣遣って来ましたが、今回のように急に他界されるとは思っていませんでした。今はただ、先生のご冥福をお祈りするのみです。最後に、本年1月に発行された「潮音」に掲載されている先生の遺作となった短歌をのせておきます。

両手にて掬いし水が指間より
洩るるが如く時ながれけり



昭和60年春の化学科退官教授送別会で、木村健二郎（中央）、
田丸謙二（左）兩名誉教授と歓談される赤松先生（右）

鎚木先生の思い出

堀 源一郎 (天文学教室)

本学名誉教授鎚木政岐先生が昨年12月27日におなくなりになった。享年85歳であった。

先生は石川県金沢の高名な神官の家柄の出である。大正15年に東京帝国大学理学部天文学科を卒業され、引き続き理学部助手兼東京天文台技手に就任、助教授を経て昭和21年教授となられた。以後昭和38年に定年御退官になるまで37年の長きにわたって、理学部において研究、教育、行政に御尽力になった。

天文学教室の歴史において戦後の最大のイベントは、昭和35年に、旧東京天文台跡地麻布飯倉の土地（と木造バラック式家屋）を手離して、理学部の本拠地に移転したことである。麻布の土地の代償は理学部3号館となった。この移転を決断して陣頭指揮をとられたのが鎚木先生であった。

先生の御専門は天文学の中でも恒星天文学といわれる分野で、銀河回転や恒星運動の非対称流など、当時の恒星天文学の研究における世界の潮流に着目してこれを摂取推進し、わが国における恒星天文学の開拓者となられた。先生の専門分野の著作には多数の論文の他に『宇宙構造論』（岩波講座物理学Ⅷ.C. 昭和14年）があり、当時のこの分野の唯一の文献であった。

このように御専門は恒星天文学であるが、新制大学発足時は未だ恒星天文学という講義科目が無かった時代で、先生は天文学第二講座を担当されて球面天文学（1年4単位）と実地天文学（半年2単位）を講義された。

筆者は、新制大学第1期生として昭和26年4月に天文学科（当時は物理学科天文課程）に進学し、麻布飯倉の理学部天文学教室において初めて聴講したのがこの球面天文学であり実地天文学であった。太陽はお天道さま、月や星はお月さまとお星

さまになって、なかなかにうるおいのある名講義であった。

実地天文学の講義では、天体望遠鏡の鏡筒は自分自身の重さで屈曲しているものと思え、と聴かされびっくりした。その他にも、子午儀の垂直度盛環の軸は環の中心を通っているはずがなく、環は円であるはずがなく、目盛は一様に刻まれているはずがなく、軸受のボールベアリングは球であるはずがない、と思うことを学んだ。これらの講義の内容は『応用天文文学』（河出書房、昭和26年）にその片鱗を伺うことができるが、その名調子を偲ぶことはできない。

昭和28年には新制大学院が発足し、先生は今度は恒星天文学と位置天文学の講義を担当された。大学院修士課程の学生は3名だったので、聴講が2名になることはよくあったし1名になることも時にあった。先生の講義は大学院になってもお天道さま、お月さま、お星さまの名調子は変らなかつたし、さらに学生が1名でも皆さんは……と語りかけられたのが印象に残っている。

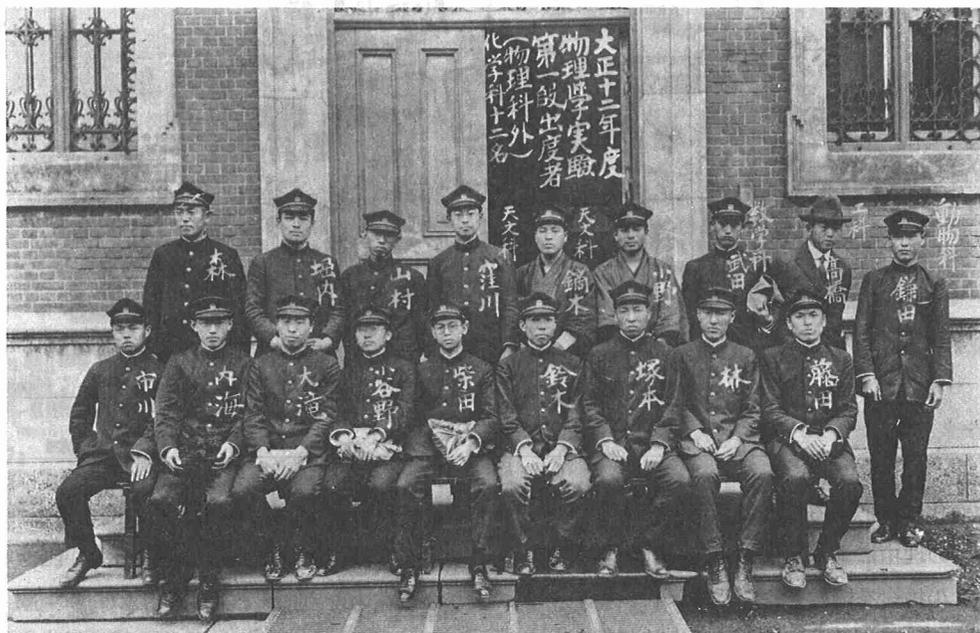
先生は古武士を偲ばせる豪放磊落なお人柄でありながら、案外と細かに気を配られて、温情豊かに学生にも接せられた。筆者はその昔典型的な貧乏学生であって、学会への旅費もまゝならぬことを見通されてであろうが、何気なく、先生の講演の資料などを運ぶアルバイトにかこつけてポケットマネーを出してくださったこともあった。

そういう先生の周囲にはおのずから人が集まって、恒星天文学の研究者集団がつくられた。この研究集団はSAMと愛称された。“来る者は拒まず去る者は追わず”という先生の主義であったが、去る者は皆無で、恒星天文学の分野を離れて多数の研究者がSAMに参加した。夏の研究会がSA

Mの年中行事であり、或るときは妙高高原池の平で、また或るときは信州菅平高原で行なわれた。先生を中心とした集会は懐しい思い出として残っているが、東京天文台木曾観測所のシュミット望遠鏡の構想がSAMの中で萌芽したことを記したい。このシュミット望遠鏡が、東京天文台の改組に伴って理学部所属となることを思うと感激ひ

としおである。

実は昨年12月27日のその日、先生がおなくなりになる数時間前に、吉祥寺の病院に先生をお見舞いに伺ったときには、案外にお元気そうな先生であつたので少しく安心してお別れした矢先に、先生の訃報に接して全く信じられない気持であつた。謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。



理学部中央化構想について

理学部企画委員会建物小委員会

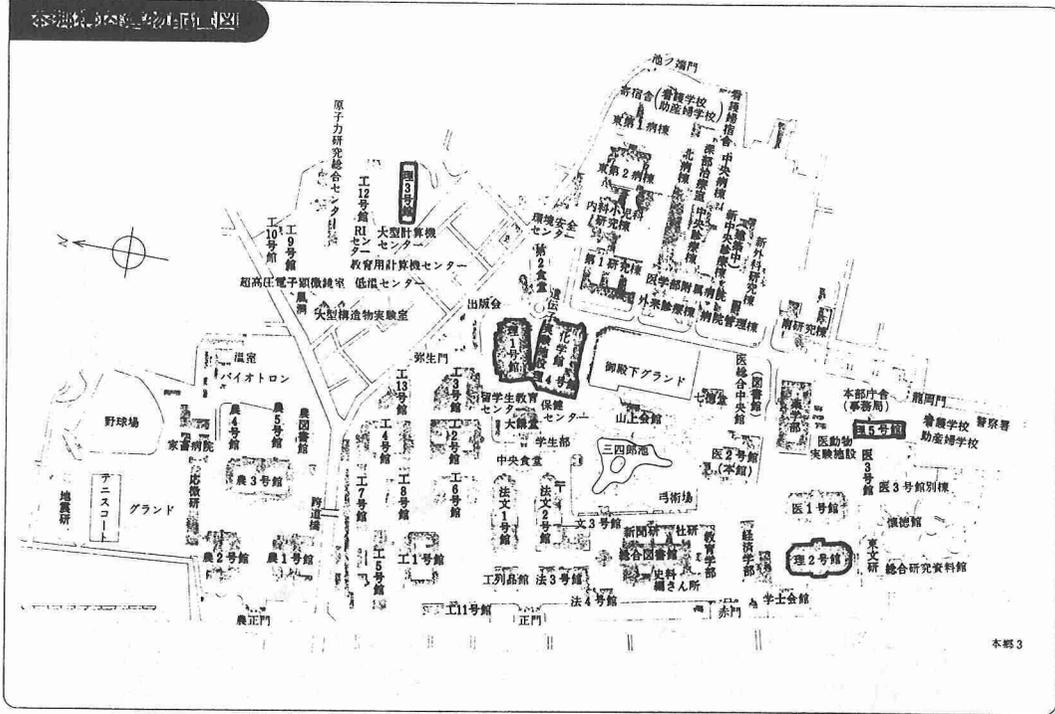
1. はじめに

理学部の建物は現在著しく散在している。1号館、4号館、7号館および化学館は弥生門地区に比較的まとまっているが、2号館は赤門地区に、3号館は浅野地区に、5号館は竜岡門地区にと各方向に点在しており、最も離れている2号館と3号館の間は直線距離で約900メートルもある。そのために、学問上の交流や、学生の教育環境や、事務的管理運営にとってはなほだしい不都合が生じている。またこのことは、最近盛んになりつつ

ある、複数学科にまたがる境界領域的な研究にとっても大きな障害である。

一方、近年の著しい傾向として、理学部の性格が大学院に重点を置く方向に変化しつつあり、それと関連して研究教育のための設置が増加し、多様化し、大型化しつつある。この変化に対応するために、機構上の改革が「理学院構想」として現在検討されているが、対応は機構の側面のみで完結するものではありえず、建物、設備の面からの改革も必要である。現在の老朽化した狭い建物で

図 1



はこの変化に対応することは不可能である。

これらの理由により、理学部では「理学部中央化構想」の検討を開始した。この文書は理学部内外に対して構想の概要を説明するために作成したものである。

2. 現況

中央化が緊急の必要である理由を以下に列挙するが、これらは互いに関連していて、どの一つも単独に解決できるものではない。

2.1 建物の分散

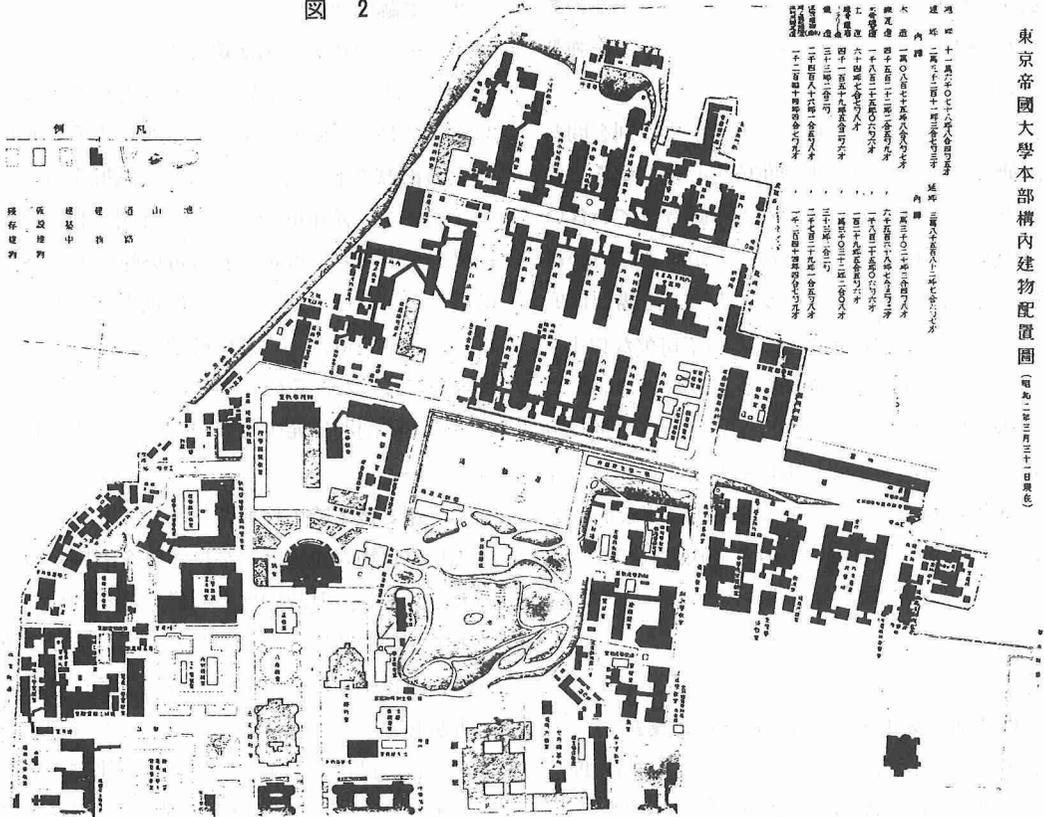
理学部の建物が散在している様子は、第1図に明らかである。これらの地理的配置にはもちろん相応の歴史的背景が存在するが、それらは現在の不都合を正当化するものではない。例えば、学問上で非常に近い関係にある生物化学教室と生物関係の3教室（動物学、植物学、人類学）がそれぞれ3号館と2号館に別れて配置されていたり、やはり近い関係にある地球物理学教室、地質学教室

・鉱物学教室、地理学教室がそれぞれ3号館、5号館、2号館に別れているなどの著しい困難がある。この散在のために、教官や学生間の学問上の交流が妨げられ、連続する講義の間に学生の移動のための時間を設ける必要が生じ、講義室の効率よい運営ができず、また事務機構に多くの不都合が生じている。

2.2 建物の老朽化

理学部の建物は老朽化が著しく進んでいる。特に1号館は東棟が大正15年、南棟が昭和3年の建築であり、築後60年を経て外壁の亀裂、一部剥落などの危険な兆候を呈し、現実に安全性に問題が生じている。ちなみに、この頃建築された主要な建物には、安田講堂、工学部列品館、総合図書館、旧地震研（すでに取り壊し済み）、法文1号館などがあるが、いずれも理工学の実験室として使用できる状態ではないことは明白であり、またそれ以前に建られた主として工学部の建物はほとんど現存しない。参考のために昭和2年の構内建物配

図 2



置図を第2図に示す。

1号館の北および西棟も、戦後の早い時期に建られたためにその質が悪く、老朽化が著しく、上下水道、ガス、電力などの設備は修理が追いつかないほど劣化している。3号館も戦後の建築であるが、設備に数多くの障害が生じている。

2.3 基準面積

昭和62年に7号館が完成した時点で、理学部は全体として数学上の基準面積を達成することができた。しかしその内容は上にも述べたように著しく質の低いものである。そのような建物の中で、基準面積では想定されていないような大きな面積を要する装置や、重量のある装置、また高度の危険を伴う高圧装置、強力レーザー、X線装置などを用いた実験が行なわれ、極めて危険な状態である。さらに、近年の著しい傾向である科学研究費などによる大型装置の導入や、電子計算機の急増、留学生の増加なども、従来の基準面積の根拠

と相容れない。

このような状況の変化と、次に述べる東京大学理学部の大学院に関する特殊性を考慮するとき、全国立大学に一樣に適用される基準面積は理学部にとって容認しがたいまでに不足なものであり、実情を踏まえた現実的な面積を要求せざるをえない。

2.4 大学院

周知のように、東京大学はその重点を大学院に移し、いわゆる「大学院重点大学」化しようとする計画の立案が全学的に進行しつつあり、その先導的役割を担っているのは「理学院構想」である。「理学院構想」が緊急課題として取りあげられるに至った経緯の詳細は他に譲るが、この構想が夢を求めた改革ではなく、現実に適応するための改革であること、すなわち、東京大学理学部においては、自立した研究者である大学院学生の数が、主として基礎的学問の修得を目的とする学部学生

の数を二倍程度にまで上まわった結果、学部のあるかたが変質したことへの対応であることを強調したい。

自立した研究者は教官、大学院学生の別を問わず、研究活動のための建物面積を必要とする。このことが全く、あるいは殆んど考慮されていない現行の基準面積では、満足な研究ができないのは明白である。社会のより高度な専門家の需要に応えるためには大学院教育の充実が不可欠な以上、研究用の面積は緊急に確保されねばならない。

外国人留学生が増加していることは全学的傾向であるが、特に大学院学生にそれが多いたのは理学部の特徴である。近い将来、出身国で指導的研究教育者になるべき人材に、劣悪で狭隘な空間での研究を強いているのは、一学部の問題にとどまらない大問題というべきであろう。

3. 理学部中央化——1号館地区への集結

上述のような緊急の要請を受けとめ、同時に理学部の活動のより一層の活性化を図るためには、まず建物の集中と面積の増強が必要であるという結論に理学部は達した。この中央化を実現する場所としては、現在最もまとまりのよい1号館周辺が唯一の解である。どの程度の集中が可能であるか、集中のための過渡的混乱をいかに凌ぐか、などを検討するためのワーキンググループを発足させ、作業が進行中である。以下に現時点での計画の概要を述べる。

3.1 集中の規模

1号館を建て替えて高層化し、1号館、3号館、5号館の全入居者、および2号館の一部の入居者を収容する。新しい1号館は7~11階建てとし約5万 m^2 の床面積を確保する。これによって理学部の各教室の面積はほぼ1.3倍になり、現在の不足分をほぼ解消することができる。この面積増加の規模は「理学院構想」を実現するために必要な数字である。建物は電力、水道などの経費が最小になるように設計される予定である。

3.2 遺跡問題

本郷構内の建築計画が遺跡出土のために大幅な遅延を余儀なくされていることは周知である。1号館建て替えに際してもこの危惧があるために専門家の指導の下に現1号館中庭の試掘を行った。その結果1号館中庭のほとんどは明治19年建築の理科大学であると推定される古い建物の建築時に破壊されていること、1号館は地下室をもつために建物の下の遺跡もすでに破壊されていることが明らかになった。このために、1号館建て替えにおいて遺跡問題は発生しないものと考えられる。

3.3 建て替え時の移転

新しい建物の規模は一挙に建築を実施するには過大であるし、財政的にも同様であるため、年次計画で4期程度に分けるのが妥当であろう。新しい建物の建築中には現1号館の居住者を移転する場所が必要であるから、その意味でも分割建築は望ましい。最初に大正15年建築分の建物を解体するとすれば約4千 m^2 の移転面積が必要となるが、それをどこに求めるかは現在検討中である。たとえば、化学旧館東棟をまず建て替えて移転する案や、安田講堂裏に新しい建物を作る案などが考えられている。ただし、利用できる移転面積が4千 m^2 に満たない場合にも、一部分を各号館に分散して圧縮収容することによって建て替えを実行することは可能と考える。

4. 全学的再開発へむけて

東京大学のキャンパスの再開発がいわれてからすでに久しい。昭和50年代前半に作られた本郷キャンパス再開発の壮大な計画図をみると、当時すでに再開発の緊急性が強く認識されていたことがわかるが、そのうち現在までに実現したものにほとんど無に等しい。そしてこの十数年間に、さらに老朽化と狭隘化が加速度的に進行してしまった。この質、量にわたる劣化のために、東京大学は社会に対して優れた研究者としての大学院修了者を供給するというその本来の任務を遂行することが

困難になってきただけでなく、優れた大学人を自己再生産することさえ難しくなってきた。

また、各方面で頻りに指摘されるように、我が国の大学の教育研究環境は、主として理工科系において、先進諸外国のみならず、新興諸国と比較しても著しく劣悪である。特に東京大学の場合には、NATIONAL UNIVERSITYとして他国のそれと比較すれば、現状は絶望的さえある。東京大学における外国人留学生の急増は喜ばしいことであるが、彼らがこの現状を体験して帰国するとき、はたして後継者を期待できるかどうかは、はなはだ疑問である。

東京大学本郷構内の建物の老朽化の主な原因は、大学の歴史が古いことと、他の大きい国立大学と対照的に郊外移転をしていないことである。これらを立て替え、再開発することは全学的な急務で

あるが、それが実行されない理由として財政的なもの以外に、遺跡問題と建て替え中の移転の場所がないことが挙げられる。この二つの障害は独立ではない。何故なら、移転場所があれば現存の建物を解体できるし、現存する建物の下に遺跡は理学部1号館の場合のように既に破壊されている可能性が高いからである。したがって、何よりの急務は本郷構内に全学的に使用できる移転場所をもつことである。

この理学部中央化構想に伴って、もし建物に余裕ができれば、それを全学的な建て替えの最初の移転に利用することによって本郷キャンパスの建物更新を開始することが可能になり、ひいては本郷キャンパスの総合的な再開発に先鞭をつけることになるであろう。

《 学部消息 》

教授会メモ

62年12月2日（水）臨時教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題
1. 大学入試について
 2. その他

62年12月16日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題
1. 前回議事録承認
 2. 人事異動等報告
 3. 奨学寄附金の受入れについて
 4. 教務委員会報告
 5. 企画委員会報告
 6. その他

62年1月20日（水）定例教授会

理学部化学本館5階講堂

- 議 題
1. 前回議事録承認
 2. 人事異動等報告
 3. 奨学寄附金の受入れについて
 4. 人事委員会報告
 5. 教務委員会報告
 6. 東京大学理学部規則の改正について
 7. 企画委員会報告
 8. 理学部長候補者の選出について
 9. 評議員候補者の選出について
 10. その他

62年2月17日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- | | |
|---|---|
| <p>議 題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回議事録承認 2. 人事異動等報告 3. 学士入学について 4. 学部学生の休学について 5. 昭和63年度民間との共同研究 6. 人事委員会報告 7. 会計委員会報告 8. 企画委員会報告 9. 臨海実験所長の選出について 10. 地球物理研究施設長の選出について | <ol style="list-style-type: none"> 11. 分光化学センター長の選出について 12. 中間子科学研究センター長の選出について 13. 地殻化学実験施設長の選出について 14. 企画委員会委員の選出について 15. 人事委員会委員及び会計委員会委員の半数改選について 16. その他 |
|---|---|

人 事 異 動

(講師以上)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
動物	講 師	井 尻 憲 一	62. 12. 1	昇 任	アイソトープ総合センター 助教授へ
植物	講 師	廣 瀬 忠 樹	63. 1. 1	昇 任	東北大学教授へ
植物	講 師	井 上 康 則	63. 1. 1	昇 任	助手より
物理	助 教 授	十 倉 好 紀	63. 1. 30	休職更新	63. 2. 28まで
臨海	教 授	森 澤 正 昭	63. 2. 1	昇 任	海洋研助教授より

(助 手)

物理	助 手	佐 井 文 憲	62. 12. 31	辞 職	
化学	助 手	古 川 行 夫	63. 1. 1	転 任	東北大学助手より
素粒子	助 手	高 田 栄 一	63. 1. 1	配 置 換	物理学科助手より
植物	助 手	河 野 重 行	63. 1. 1	転 任	岡崎国立共同研究機構助手 より
地殻化学 実験施設	助 手	五十嵐 丈 二	63. 1. 1	採 用	
化学	助 手	江 川 千佳司	63. 1. 10	休 職	64. 12. 31 まで
物理	助 手	鈴 木 厚 人	62. 2. 16	昇 任	高エネ研助教授へ
物理	助 手	三 明 康 郎	63. 2. 16	休職更新	63. 3. 31 まで

(職 員)

物理	事 務 官	江 川 礼 子	63. 2. 2	辞 職	
----	-------	---------	----------	-----	--

外国人客員研究員

所属	受け入れ教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
情報	後藤 教授	中華人民共和国	丁 懷 東	雲南工学院講師	63. 1. ~ 63. 12.	
天文	祖父江助教授	ドイツ 連邦共和国	Krause Marita	マックスプランク電波天文学研究所研究員	62. 12. 5~ 63. 3. 31	
情報	國井 教授	日 本	Watanabe Hiroyuki	メースカロライナ大学計算機科学科助教授	63. 5. 15~ 63. 8. 15	
情報	國井 教授	カ ナ ダ	Teh, Hung Chuan	シンガポール国立大学上級講師	63. 3. 28~ 63. 5. 8	

理学博士の学位取得者

〔昭和62年11月25日付（5名）〕

専攻	氏名	論文題目
論文博士	小池 和彦	古典群の表現のテンソル積の分解について —普遍指標の方法を用いて—
論文博士	佐竹 健治	1983年日本海中部地震津波の地震学的研究
論文博士	館野 正樹	土壤微生物の増殖と維持—エネルギー論的考察
植物学	多田 多恵子	多年生草本クガイソウの個体群動態と生活史戦略
地球物理学	中村 正人	リシウムイオンビームの飛翔時間測定法を利用した電離層における電場測定

〔昭和62年12月23日付（4名）〕

論文博士	白木 亮司	流紋岩質ガラスと熱水溶液間のイオン交換反応に関する実験的研究
論文博士	中西 伸樹	マウスTリンパ球受容体 γ 鎖の発現様式と機能に関する研究
論文博士	水町 竜一	2次元全空間を占める非圧縮流体の粘性消滅問題
論文博士	門野 良典	銅中での正ミュオンの量子拡散

〔昭和63年1月27日付（2名）〕

植物学	椎名 隆	ホシツリモ原形質膜の興奮性機構に関する研究
論文博士	野村 和正	グラフの交叉図式

〔昭和63年2月24日付（8名）〕

論文博士	野川 宏幸	マウス胚唾液腺上皮の分枝形成における間充織の機械的作用の解析
論文博士	福井 由理子	鳥類胚尾腺の発生過程における細胞増殖の様相
物理学	徳宿 克夫	ハドロン・原子核反応における二粒子相関の研究

専攻氏名	論文題目
論文博士 戸瀬 信之	第二超局所化と包含的な二重特性多様体を持つ微分方程式系
論文博士 中村 周	Schrödinger 方程式の散乱作用素の構造の研究
論文博士 榎本 陽子	惰性指数2または3の可換不足群を持つP-ブロックについて
論文博士 古田 幹雄	ホモロジー3球面のなすホモロジー同境界
論文博士 小林 亮一	複素曲面上のインシュタイン・ケーラー計量と一意化

海外渡航者

(6ヶ月以上)

所属官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学助手	江川 千佳司	連合王国	63. 1. 10～ 64. 12. 31	準安定磁性薄膜の触媒作用に関する研究のため
鉱物助手工	藤 康弘	アメリカ合衆国	63. 2. 27～ 63. 8. 31	高圧鉱物学の研究のため
数学助教授	加藤 和也	フランス	63. 3. 1～ 63. 8. 31	パリ第11大学高等科学研究所における研究交流のため

理学部長と理職の交渉

理学部長と理学部職員組合との交渉はこの間昭和62年11月26日と12月17日、昭和63年1月28日と2月16日に行われた。その主な内容は以下のとおりである。

1. 専門行政職俸給表適用と技術職員の組織化について

理職は、技官の専門職としての法的な職務評価の向上とそれによる待遇改善、そのため部課室制ではなくスタッフ制による組織化を要求してきたが、理学部が本部にどのような意見を上申したのか、回答を要求した。これに答えて理学部技官問題検討小委員会の宮澤委員長は、「理学部では、理学部だけで組織の単位を作り職務内容を基に組織化することが適当と考えている」と述べた。

また、理職は昨年宮澤素案に対する見解と独自の組織化案を公表し、それに対する理学部側の意見を要求してきた。宮澤委員長は、「国大協が各

大学からのアンケートの結果を3月中旬までにまとめることになっており、その結果をふまえて任期中に何らかの結果を残したい」と回答した。

2. 大学改革問題について

理職は、大学院充実の方策や職員問題等々の基本的問題を積み残したままの学院発足には反対であるとの立場に立ち、説明会の開催、情報の公開等を要求してきた。そしてこの間1月25日に学部長との緊急会見を行ない、大学院問題懇談会での議論の内容や今後のスケジュールについて公表を要求した。

学部長は、この問題について、「第2次中間答申を1月26日付で関口大学院問題懇談会座長から総長に提出することが同懇談会です承された。今後のスケジュールについては、今後の懇談会で検討されることになっている」と回答した。

理職はまた、今回の大学院改革の拙速な決定は

遺憾に思うという意見を述べ、理学部全構成員を対象とした説明会の開催を求めた。学部長は「説明・懇談会を2月25日に開催する予定である」と回答した。

3. 定員削減問題について

今回の定員削減は今年の3月から67年3月までに17名が割り当てになっていることが明らかとなった。理職は、これは重大な問題であるとの認識に立ち、理学部側がどのように対応しているか回答を要求した。

学部長は、「今回の定員削減は重大な問題であり、総長も危機感を持っており全学的に対処しているが、理学部では企画委員会でも対策を考えている」と回答した。

4. 昇格、待遇改善について

この間、暫定定数が明らかになった。理職は1

月のヒアリングに備えて事務官の4級昇格の要望書を提出し、善処を要望した。

学部長は、「今回のヒアリングでは色々な角度から要望を出している」と回答した。理職は高位号俸者には女性が多いことを指摘し、柔軟な対処を要望し、更に、技術系と図書系の昇格改善について要望書を提出した。学部長は、「要望書の内容をふまえて引き続き本部に要望していく」と回答した。

また、行(一)職員の待遇改善及び行(二)職員の行(一)振り替え、定員外職員の定員化、教務職員の助手化等の問題は、俸給面だけでなく、職員の士気にも影響しかねないとして理職は強く実現を求めた。

学部長は、「引き続き機会をとらえて熱心に努力したい」と回答した。

編集後記

今回は理学部を退職される方々、お送りする方々から25の原稿をいただきました。また昨年千葉大に移られました飯山先生からも原稿をいただきまして大変有難うございました。豊島先生学士院賞受賞のお祝い、という大変嬉しい伊庭先生の原稿とならんで、昨年末から相次いでお亡くなりになった3人の名誉教授の先生への追悼という悲しい記事も掲載となりました。この号をもちまして編集担当交代となります。一年間、お忙しい所を快く原稿をお書き下さいました皆様、またご協力いただいた事務部の方々にお礼申し上げます。

(田賀井)

編集

田賀井 篤 平 (鉱物)	内線	4544
高 橋 正 征 (植物)		4474
佐 藤 勝 彦 (物理)		4207
横 山 茂 之 (生化)		4393
佐佐木 行 美 (化学)		4359

印刷.....三鈴印刷株式会社